

松本市文化財調査報告No.76

松本市島立三の宮遺跡Ⅲ

—— 緊急発掘調査報告書 ——

1989・3

松本市教育委員会

松本市島立三の宮遺跡Ⅲ

—— 緊急発掘調査報告書 ——

1989・3

松本市教育委員会

序

松本市島立公民館、出張所は施設の老朽化が進み、建て替えの必要が生じていました。このため松本市としては昭和63年度に場所を移して新築することにし、その前段に行った建設用地の発掘調査の結果をまとめたのが本書であります。

松本市島立地区は松本平の穀倉の一つですが、また、市内でも有数の古代の遺跡が多いところでもあります。過去数年間に亘るほ場整備に伴う発掘調査や長野自動車道建設の事前の発掘調査で示された、当地区の古墳時代から中近世に及ぶ遺跡の姿の卓越する内容は衆人の注目するところでありました。今回発掘調査した三の宮遺跡も過去に当市教育委員会で2回の発掘調査を行って多数の遺構、遺物の発見が報じられており、大規模で内容の濃い遺跡であることが判明していました。

今回の調査では、狭い面積のなかから古代・中世の遺構や遺物が多数発見されたことは本書に記すとおりですが、その他にも近世・近現代のものも出土も多く、この地が古代から現代に至るまで地域の中心地であったことを物語りました。まさに新築される施設にふさわしい場所であることが、発掘調査でも証明されたのです。今後、島立地区ではこれまでの幾多の発掘調査の成果に基き、地域の歴史を復元していく試みが行われるようになりましょう。そのときに今回の調査結果が僅かでも役に立つことがあるならば関係者一同、無上の喜びであります。

最後に、今回の調査を実施するにあたって御協力くださった皆様方に心からなる御礼を申し上げます。

平成元年 3月

松本市教育委員会教育長 中 島 俊 彦

例 言

1. 本書は、昭和63年4月16日より6月15日にかけて行なわれた、松本市島立に所在する、三の宮^{さんみや}遺跡の緊急発掘に関する報告書である。
2. 本書の執筆は下記の通り各々が行ない、以下高桑俊雄がまとめた。

第1章 事務局

第2章 第1節 太田守夫

第2節 3)、4)、松沢利幸

第3節 1)、竹原 学 2)、4)、神沢昌二郎

3. 本書の編集は土橋久子が行なった。
4. 本書作成に関する作業の分担は次の通りである。

原図作成：丸山恵子 百瀬二三子 松沢利幸

遺構図整理・トレース：石合英子 神沢ひとみ

遺物復元：上條尚美 滝沢智恵子

遺物実測・トレース：松尾明恵 土橋久子（土器） 神沢昌二郎（鉄器）
高桑俊雄（石器、土製品）

一覧表作成：川窪命子

写真撮影：宮鳴洋一

5. 出土遺物及び図類は松本市考古博物館が保管している。

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

今回の発掘調査は、松本市島立公民館、出張所、及び島立児童センター建設工事に先立つものであるが、調査に至る経過は以下の様である。

島立公民館・出張所は施設の老朽化が進み建て替えが必要になっていた。そこで昭和56年度に計画された松本市内22館構想に基づき、昭和62年度に建設計画が作成された。しかしながら建設予定地の一部は周知の埋蔵文化財包蔵地とされている三の宮遺跡の範囲内にあり、昭和61・62年度に行われたほ場整備やグランド造成に伴う三の宮遺跡の他の地点の発掘調査では多数の古墳時代から中世に亘る多数の遺構・遺物が発見されている状況から今回の建設予定地でも同様の事態が予測され、建設工事にあたって何らかの保護措置が必要となった。このため昭和62年10月に関係各課間で当該文化財保護のための事前協議を実施した結果、工事着手前に発掘調査を実施して記録保存を図ること、調査予定時期は昭和63年4月から6月までとすることが決められた。発掘調査は松本市教育委員会が直営事業として実施することとし、昭和63年5月10日に三の宮遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。

第2節 調査体制

調査団長：中島俊彦（教育長） 調査担当者：神沢昌二郎（市立考古博物館長）

現場担当者：高桑俊雄 松沢利幸（社会教育課埋文担当）

調査員：太田守夫 土橋久子

協力者：浅野房子 浅野八重子 石合英子 五十嵐周子 五十嵐千恵 伊円早苗 今村嘉子
岩野公子 内沢紀代子 小野勝近 小野いつ美 開嶋八重子 川窪命子 金井ひろみ
上條成子 上條尚美 神沢ひとみ 小松正子 滝沢直美 武井緑 田多井うめ子
田多井亘 塚田文字 萩野幸枝 原沢一二三 藤森寿々子 町田庄司 松尾明恵
松本かつ代 松森幸子 丸山恵子 百瀬二三子 百瀬義友 矢島利保 若井孝夫

事務局：浅輪幸市（社会教育課長） 田口勝（文化係長） 熊谷康治（主査）

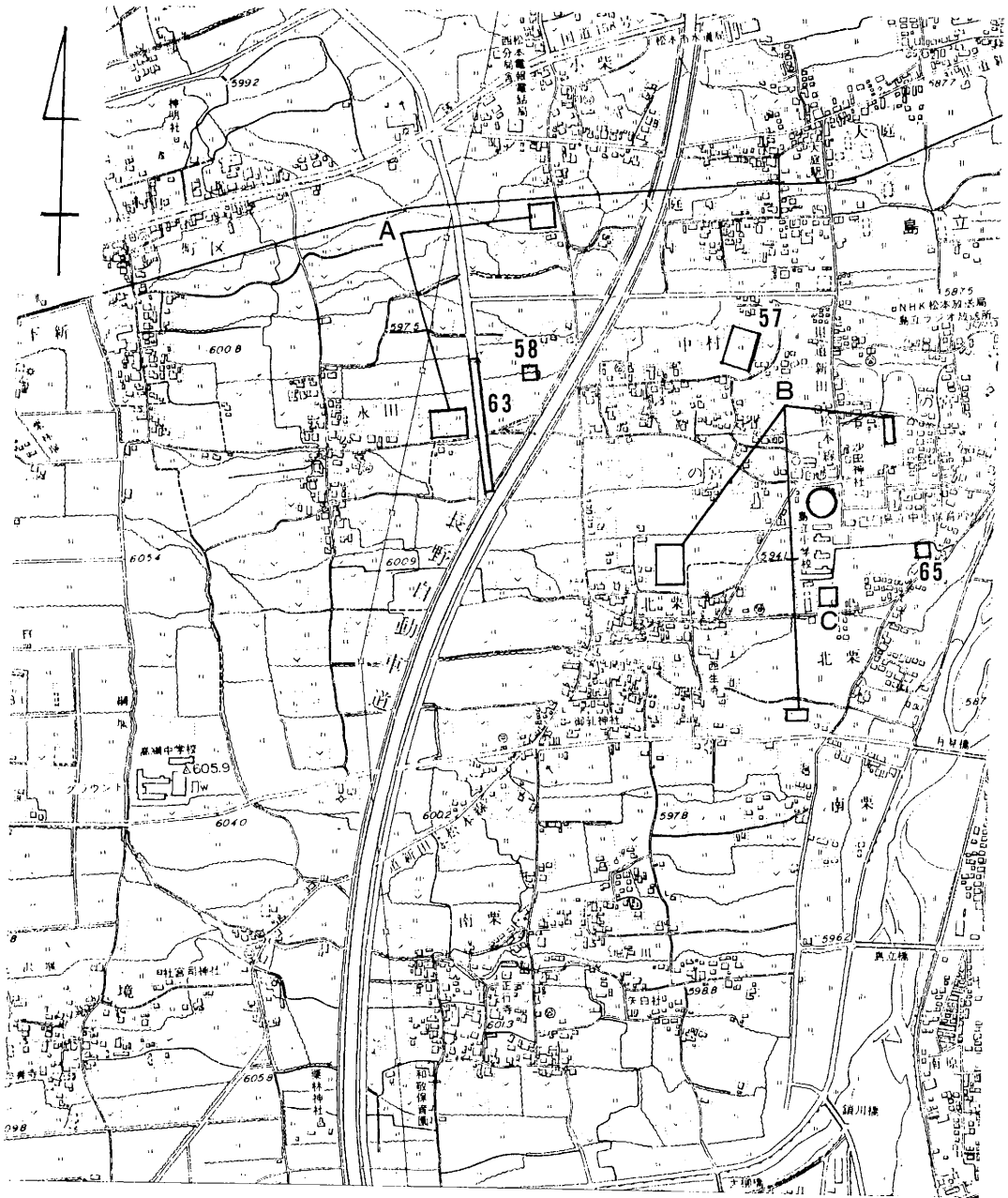
直井雅尚（主事） 山岸清治（事務員） 三沢利子

第3節 作業日誌

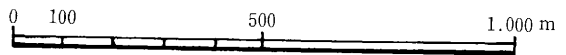
- 昭和63年4月15日 (金) 晴 第1検出面の南側を重機による表土剥ぎ。 市教委：高桑（以下同）
- 4月16日 (土) 晴 東側イチイの木の抜根、遊具除去。
- 4月18日 (月) 曇 プレハブ設置、テント設営。
- 4月22日 (金) 曇 2地区重機による検出終了する。 1地区重機による検出開始。
作業員：百瀬義友他1名（以下作業員員数のみ記載）
- 4月25日 (月) 曇 1地区、重機による検出終了する。作業員：1名
- 4月26日 (火) 晴 1地区、検出作業。 作業員：10名
- 4月27日 (水) 曇 1, 2地区、検出作業、散水作業。 作業員：14名
- 4月28日 (金) 晴 引き続き検出作業、ほぼ終了する。 作業員：14名
- 5月6日 (金) 晴 1地区縦穴状遺構1（以下縦1とする）土壌より遺構掘り下げ開始。 作業員：15名
- 5月7日 (土) 曇後雨 1地区、トランシットによる測量、全体図作成。午後雨のため作業中止。
作業員：2名
- 5月9日 (月) 晴 トランシットで測量継続。縦1、土壌 土層図作成。ピット、墓址、建物址
1（以下建○とする）掘り下げ、土層図作成。 作業員：17名
- 5月10日 (火) 曇後雨後曇 2地区トランシットによる測量。1地区平面図作成開始。
土壌、縦1、墓址 写真撮影。 作業員：10名
- 5月11日 (水) 曇 平面図継続。2地区土壌掘り下げ、土層図作成。作業員：11名
- 5月12日 (木) 雨 雨のため作業中止。
- 5月16日 (月) 晴 1地区平面図継続。作業員：7名
- 5月17日 (火) 晴 1地区土壌掘り下げ、写真撮影。1, 2地区平面図継続。
1地区の全景写真撮影。重機により1地区より掘り下げ開始（10～20cm下げる）。 作業員：5名
- 5月18日 (水) 晴 1地区第2検出面、検出作業開始。2地区午前中重機により掘り下げる。午後検出作業。1, 2地区トランシットによる測量。1地区1号住居址（以下○住とする）より遺構掘り下げ開始。作業員：15名
- 5月19日 (木) 晴 1地区遺構掘り下げ継続。1, 2住土層図作成、写真撮影。南側を掘り下げる。2地区4住より遺構掘り下げ。 作業員：13名
- 5月20日 (金) 晴 3, 4住、土層図作成。1地区より平面図作成開始。作業員：13名
- 5月24日 (火) 晴 1, 2住カマド精査、写真撮影。3, 4住、土層図作成、写真撮影。4住、

床面精査。1地区全景写真。2地区平面図作成開始。 作業員：8名

- 5月25日 (水) 曇時々小雨 4住ピット掘り下げ、写真撮影。土壙半割、土層図作成。1, 2地区測量。1住床面精査、ピット掘り下げ、写真撮影。4住カマド精査、写真撮影。島立小学校の3, 4, 6年生が見学。 作業員：9名
- 5月26日 (木) 晴 2住カマド土層図作成。1, 2地区測量継続。第3検出面重機により2地区掘り下げる(30cm)。作業員：1名
- 5月27日 (金) 晴 1地区重機により掘り下げる(30cm)。2地区引き続き重機により掘り下げ、さらに30cm掘り下げる。
- 5月31日 (火) 晴 1, 2地区検出作業。1地区、5～7住より遺構掘り下げ開始、同地区トレンチによる測量。2地区は遺構見当たらず。写真撮影。 作業員：15名
- 6月1日 (水) 曇 5～7住掘り下げ継続。建2掘り下げ、土層図作成。作業員：16名
- 6月6日 (月) 晴 5～7住掘り下げ継続。焼土址トレンチ2本掘り下げ、溝址1トレンチ掘り下げ。6住土層図作成、写真撮影。ピット半割、土層図作成。作業員：13名
- 6月7日 (火) 晴 5, 7住土層図作成、写真撮影、トレンチ掘り下げ作業継続。測量開始。 作業員：11名
- 6月8日 (水) 晴 6住床面精査、ピット掘り下げ、カマド精査、それぞれ土層図作成。溝址、焼土址の土層図作成、写真撮影。
1, 2地区平面図作成。現場作業ほぼ終了。 作業員：5名
- 6月9日 (木) 曇 第4検出面、重機による掘り下げ(30～40cm)。
- 6月10日 (金) 晴 1地区東の古墳時代前期遺物出土地の周囲、上部を削平、トレンチ掘り下げ。 作業員：4名
- 6月13日 (月) 晴 トレンチ部の土層図作成。上部削平、検出作業。作業員：4名
- 6月14日 (火) 晴 古墳時代前期遺物出土地の削平作業継続、写真撮影、測量開始。 作業員：5名
- 6月15日 (水) 晴 1地区東側検出、本日にて現場作業終了。テント撤去、道具整理、運搬(和田へ)、遺物運搬(中山へ)。作業員：5名
- 6月16日 (木) 曇 本日より図面等整理、報告書作成に向けて、次の作業を順次行っている。遺物洗浄、注記、復元、整理、拓影、実測、トレース、図版整理、原稿執筆、校正等。



○ 今回調査地



57. 58. 63. 65 は松本市文化財調査報告書ナンバー
 A. 平成元年度報告予定
 B. 平成2年度報告予定
 C. 未報告

第1図 調査地の位置と周辺の調査

第2章 遺跡の環境

第1節 地形と地質

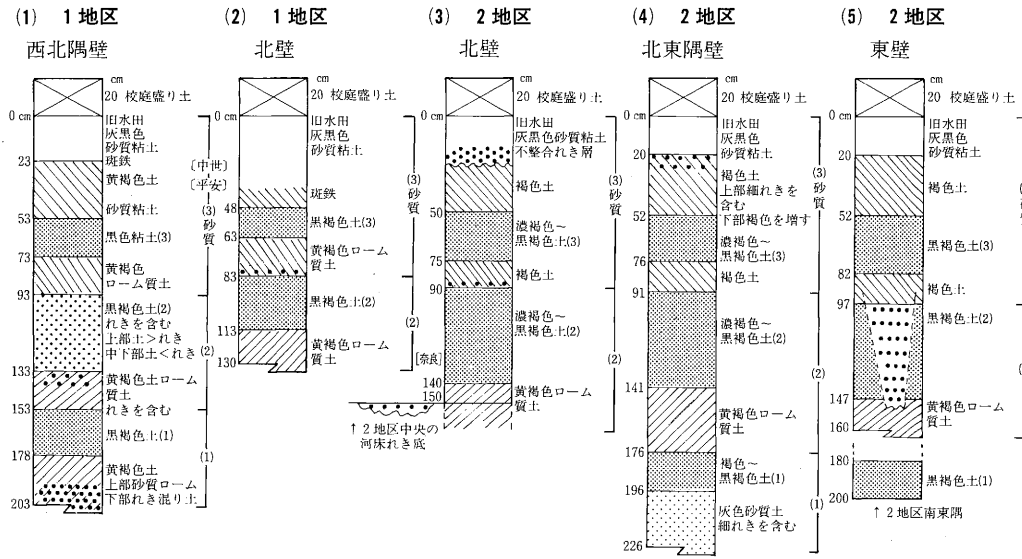
1. 調査地の位置と地形

本調査地は松本市立島立小学校の校地内の北部に位置し、東側は沙田神社の社域に隣接し付近には、一昨年から本年にかけて調査した4ヶ所の地区がある。(図1参照)いずれも梓川扇状地の沖積扇状地性堆積の最末端に当たり、堆積層が類似する。調査地は明治19年まで水田であり、その後、学校敷地となり校舎等を建設したが明治31年に校舎は南に移設され(註)、最近まで校庭として使用されていた。この為付近の調査地は、表土の状態が違い耕土(水田)の上に盛り土が見られる。東方の奈良井川によって切られた段丘崖までの距離は200m、校地の中央を東流する流れ(せぎ)は境沢で南約15mである。

2. 堆積層と礫

挿図Iは、調査地の堆積層の地層断面である。堆積の不連続面は既報の北栗遺跡III(63年)同様に扇状地の最末端に当たるので、分帯は砂礫層よりも三層の黒褐色土層に依った方が適当と思われる(1)・(2)・(3)とした。最上部20cmは前述の校庭校舎の盛り土である。水田耕土を含む上部層(3)は、いずれも90cm前後に達する厚い砂質の土層である。下部層(2)は1地区北西隅を除き厚い黒褐色土の土層で、下部に黄褐色～黄土色のローム質がある。2地区の中央には、ローム質土に貫入したN70°E東北東流する無層理の礫層があり注目される。(後述)最下層(1)は20～25cmの黒褐色土の下、1地区では黄褐色砂質ローム質土、中・大礫混じりの土層に、2地区は灰色砂質土、細礫を混じえた砂質土に移行する。この下部は、周囲の調査地の状況から礫層であると思われる。

堆積層に含まれる礫は、硬砂岩・砂岩・粘板岩・チャート・けい岩・花こう岩の円礫でいずれも梓川系統の岩石である。礫径は10cm大を最高に中・細礫がほとんどである。1地区の礫層は北西隅で表面(盛り土を除いた面以下同じ)から90～140cmの第2黒褐色土層が中心であり、上部は中礫、中・下部は中・細礫である。(I-1)第3検出面の中央及び西寄りに幅60～120cm・方向N40°E、幅30～80cm・方向N-Sの二条の細礫の流れの堆積がみられ、第3黒褐色土層下の黄褐色土層内である。2地区の礫層は、規模が大きく調査地北断面に表面から20～30cmにみられ、下層の黄褐色土層に対して不整合に入っている。断面(I-3)でみると東西総幅7.4mを越え、下層の黄褐色土を波状に浸食している。西端は黄褐色土層で終り、東端はわずかの砂・細礫が散在する薄層となり北東隅地層中(I-4)に吸収されている。礫径は7×3cmが最大で、多くは細礫である。堆積(流れ)



挿図 I 地層断面図

の方向は、NE-SWと考えられ土混じりの礫層である。中央には、表面から深さ150cm、幅2.5~3.2 m、厚さ最大30cm、堆積（流れ）の方向N70°Eに礫層の堆積がみられる。黒褐色土層(2)下の黄褐色ローム質土を浸食した無層理の礫層である。ローム質土に砂礫の混入はなく、波状の浸食はなめらかな凸凹を示している。（I-(3)・溝址1参照）河床の礫は、砂岩・硬砂岩・粘板岩・チャート・花こう岩・けい岩で礫径は砂岩・硬砂岩の10cm前後のものが多く見られる。一部に鉄分による汚染があるが、土の汚れはなくよく洗われているのが注目される。河床礫はこの面の上部にも3mの幅で堆積し、東断面（I-(5)）でみると最上面で5mに開いている。この厚い河床礫層の幅は、下底4m、上面約9m、厚さ75cmでこの浸食は黒褐色土(2)と上下の黄褐色～褐色土層におよんでいる。河床の堆積は下部ほど礫が多く、上部は北側は礫、南側は礫と砂の互層が見られる。地形の形成から黒褐色土層(2)と褐色～黄褐色土層の堆積後、黒褐色土層(3)の堆積前とと考えられる。

3. 遺跡の立地と地形の形成

堆積層と礫（礫層）の順序および関係を見ると、3回の黒褐色土層と3回の礫層の堆積があったことが分かる。2地区でみた中央の河床礫層は、黒褐色土層(2)とその上下の黄褐色土層へ及んでいて、長期の流れと考えられる。また中世・平安期の遺物遺構の出土層が、黒褐色土層(3)の堆積以後であり黒褐色土層(3)が浸食を受けていないこと、奈良期の遺構遺物の出土が(2)の黄褐色～褐色ローム質土層と推定される。奈良～平安初期頃までに、河床が形成された可能性が考えられる。また川床礫の流れが沙田神社境内に向かっていることから、神社下及び社域成立の時代決定が示唆されそうである。

註 「しまだち」 松本市島立公民館

第2節 周辺遺跡

島立地区及び近隣の和田、新村、そして奈良井川、鎖川の河岸段丘上と周辺の遺跡、さらに近年の発掘例をひろいながら時期別に概観してみよう。

まず縄文時代では中期の遺構が奈良井川の段丘上、牛の川、神戸、くまのかわ遺跡にみられ、島立地区でも南栗、北栗遺跡発掘（松本市文化財調査報告 No.35）の際に、又、現在行なっている南栗地籍の下水管理設工事の時に同様遺物を得ている。それらは地表下50cm（久保川添い）～350cmくらいと地点により埋没状況がかなり差のあることが知れる。

弥生時代になると山形村境に境窪遺跡、奈良井川東岸の宮淵本村遺跡などが知られているが、いずれもここからはかなり遠い。島立では堀川添いに中期の住居址の存在が明らかになったが集落としてはまだ判然としていない。

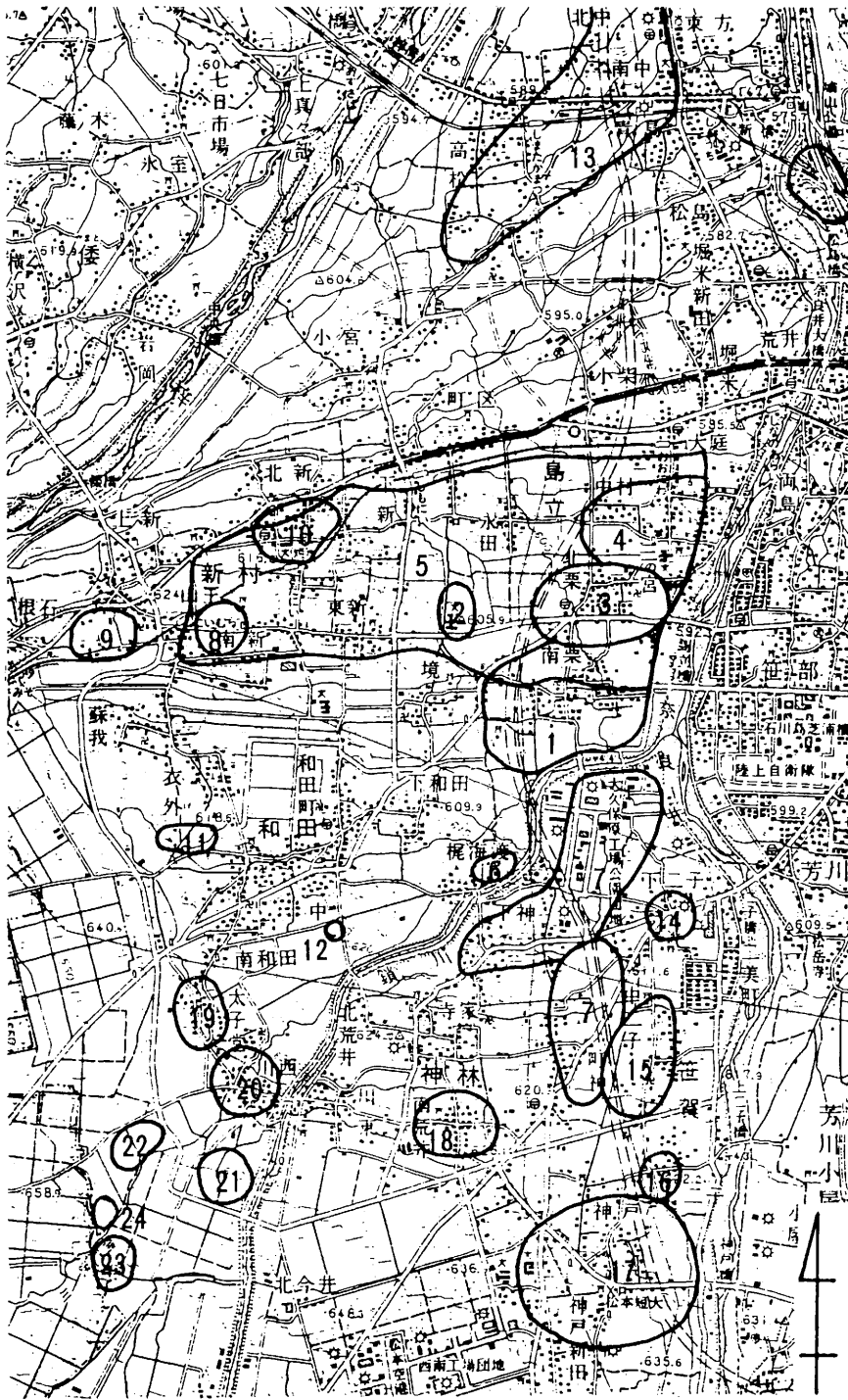
古墳時代では新村で安塚、秋葉原の終末古墳があるが、三の宮遺跡の調査でも弥生時代終末～古墳時代初頭の住居址を11基検出、調査することができた。島立では今まで空白だった時期であり新たな資料として注目に値する。

奈良時代から平安時代にかけては奈良井川添いで下神、町神、下二子、中二子、くまのかわ、神戸や島内遺跡群などを上げることができ、島立では古墳時代後期から時期的に一部を欠きながらも中世まで存続する遺跡が目につき、未報告ではあるが島立小学校南東部に古墳時代中期からの住居址が、又高綱中学校遺跡でも古墳時代の住居址を調査している。

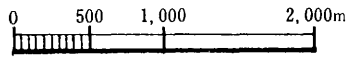
又昨年まで2度に亘り実施した三間沢川左岸遺跡では、平安時代前期末頃を中心とした270基の住居址と溝等を調査し、これらからの遺物として銅印、銅鏡、八稜鏡、帯金具と多量の緑釉陶器などを得ており、地方荘園の様相を見せ(註) 今後予定される調査を一層興味あるものとした。

昨年島立地区での調査は2遺跡、4箇所であった。北栗遺跡は遺跡としてとらえている東端(奈良井川段丘上)と北栗集落の北部である。前者から奈良～平安時代の住居址40基を検出、後者からは奈良時代～中世までの住居址21基、建物址14棟、他に中世の大きな方形区画の溝があった。又三の宮遺跡ではこのグランド部分と、沙田神社の社殿北側の地区である。こちらからは明治時代の神仏分離令による廃仏毀釈でなくなった神社の別当寺、普明院神宮寺の礎石とこれらに関わる江戸時代の井戸址を調査し得た。これらは近々に報告を予定している。なお北栗の奈良井川段丘と、三の宮の2箇所の調査地では地表下3.0m位まで深掘りし、縄文、弥生の生活面を探したが、両者とも遺物を得てはいない。土質も砂層、ないし礫層となっており、沖積平野扇端部の水流と堆積による影響であろうと考える。

註 松本市教育委員会 『三間沢川左岸遺跡 (I)』 1988



1. 南栗遺跡 (1983.84)
 2. 高綱中学校遺跡 (1984.85)
 3. 北栗遺跡 (1985~89)
 4. 三の宮遺跡 (1986~88)
 5. 新村島立条里的遺構 (1984~88)
 6. 梶海渡遺跡 (1985)
 7. 下神・町神遺跡 (1983)
 8. 秋葉原遺跡 (1982)
 9. 安塚古墳群 (1978)
 10. 新村遺跡
 11. 西和田遺跡
 12. 和田町遺跡
 13. 島内遺跡群 (1984~88)
 14. 下二子遺跡
 15. 中二子遺跡
 16. くまのかわ遺跡 (1981)
 17. 神戸遺跡群 (1979)
 18. 南荒井遺跡
 19. 太子堂遺跡
 20. 川西遺跡
 21. 川西開田遺跡
 22. 三間沢川左岸遺跡 (1987.88)
 23. 境窪遺跡
 24. 西原南遺跡
 25. 宮測ニツ塚遺跡 (1964)
宮測本村遺跡 (1985. 86. 88)
- () 内は調査年度



第2図 周辺遺跡

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

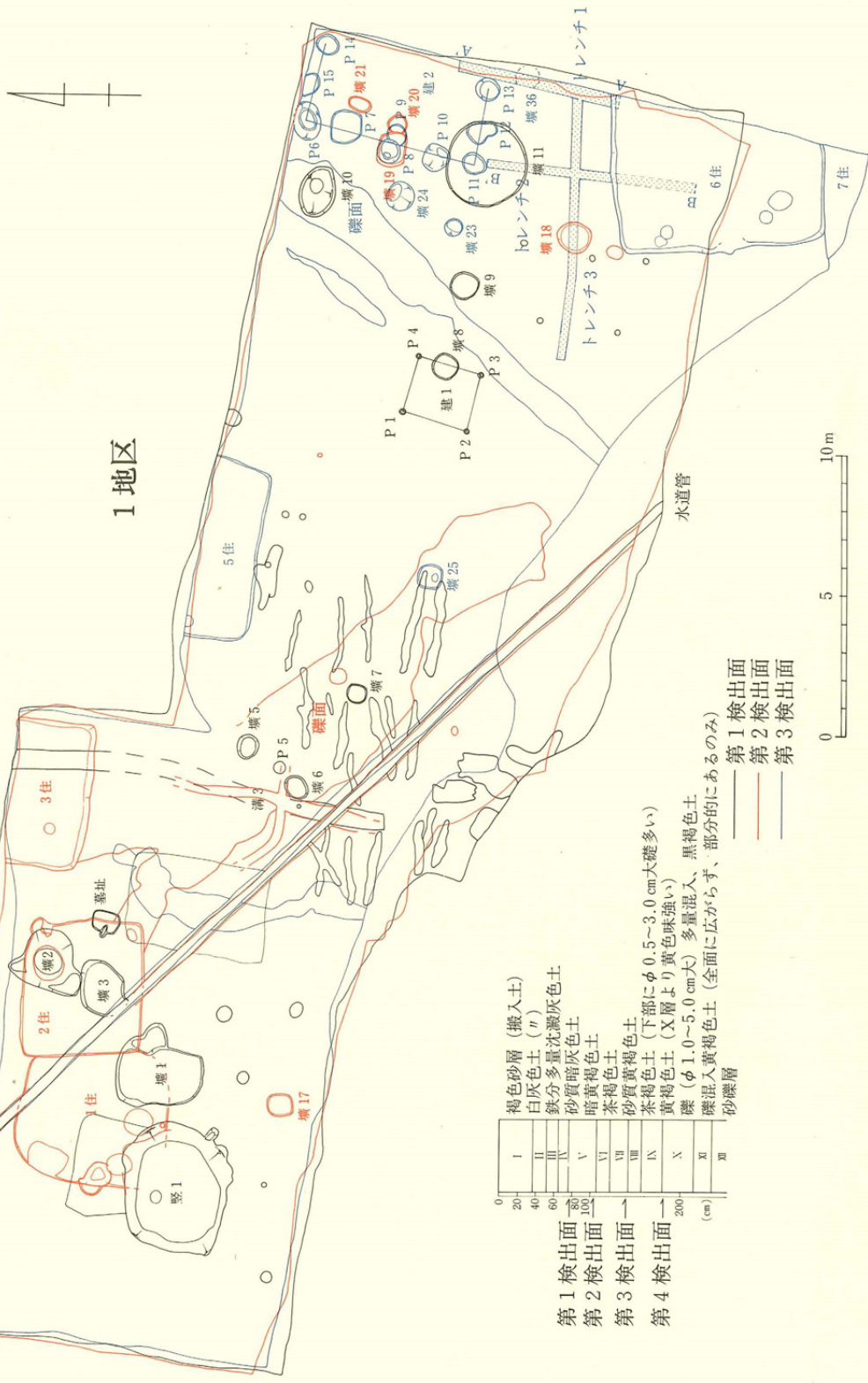
今回は建築予定部分に限定した狭い範囲の調査である。2つの地区はほぼ接しており、両者を徐々に掘り下げて行なった。4回づつ検出面を設定した訳であるが一見して遺構、遺物の見られないところは写真のみ(2地区3検)、あるいは人力による検出作業は行わず(1地区4検の東側を除く部分)、結果調査面積は3976㎡となった。

検出した遺構は、奈良～平安時代後期の住居址7、中世の竪穴状遺構1、奈良時代～中世の建物址各1、奈良～現代までの土塋24、中世墓址1、ピット22基、中世の水路、自然流路各1等である。

遺物は多種多様で、古くは古墳前期の台付甕や壺、古墳末～平安後期の土師器、須恵器の甕や坏の破片から、中近世の陶器、瓦、古銭、更に近現代の陶磁器、鉄鍋、ガラス、雨樋等々に及ぶ。この地が明治時代に畑地から学校用地となり、校舎が建ち、その建物が移動してグラウンドに整備され、その間各種の施設が新設、改設されて現在に至っていることをそのまま語るものである。

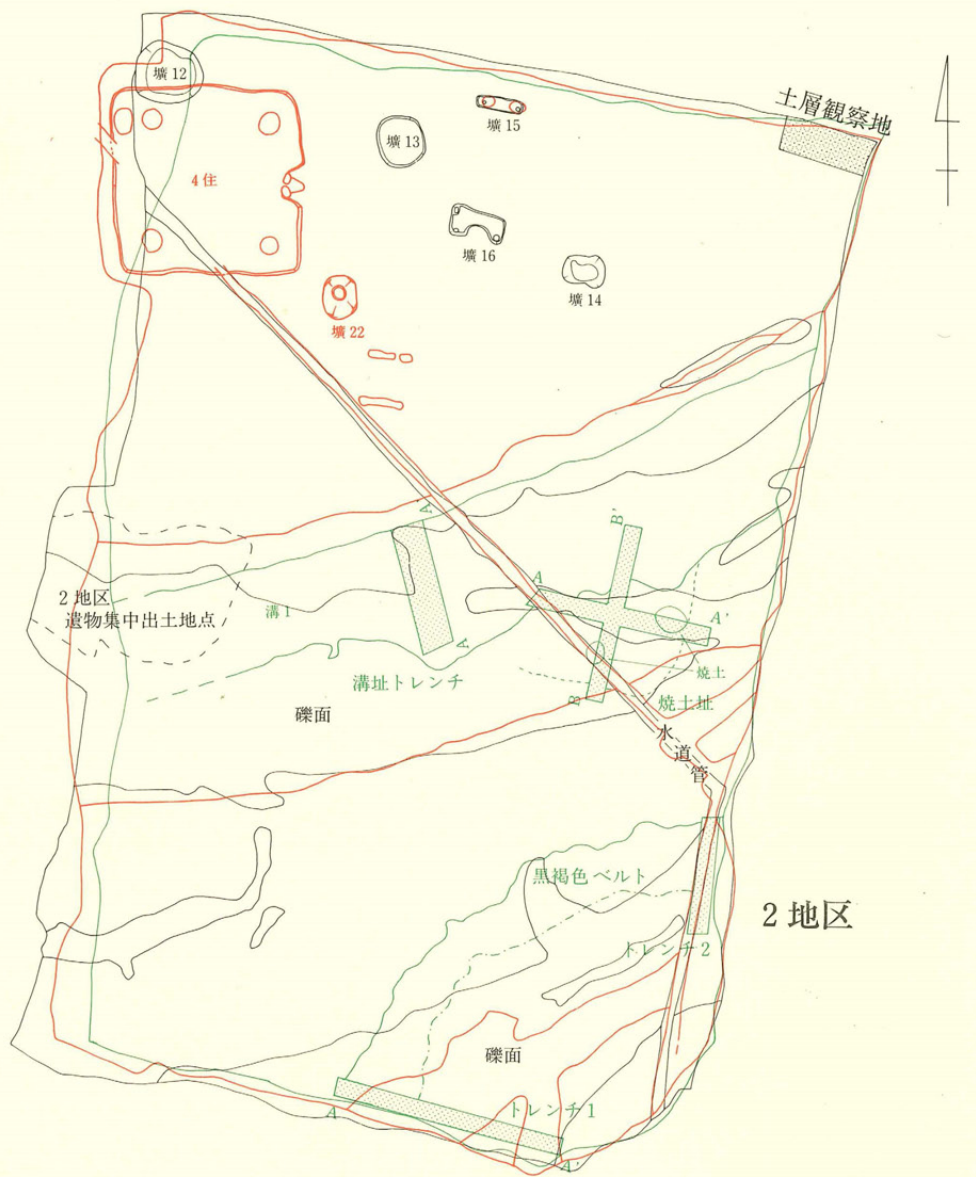


第3図 調査範囲



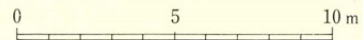
- | | |
|------|----------------------------|
| I | 褐色砂層 (掘入土) |
| II | 白灰色土 (カ) |
| III | 鉄分多量沈澱灰色土 |
| IV | 砂質暗灰色土 |
| V | 暗黄褐色土 |
| VI | 茶褐色土 |
| VII | 砂質黄褐色土 |
| VIII | 茶褐色土 (下部にφ0.5~3.0cm大礎多い) |
| IX | 黄褐色土 (X層より黄色味強い) |
| X | 礫 (φ1.0~5.0cm大) 多量混入、黒褐色土 |
| XI | 礫混入黄褐色土 (全面に広がらず、部分的にあるのみ) |
| XII | 砂礫層 |
- 第1検出面
 第2検出面
 第3検出面

第4図 遺構配置(1)・土層概略



0	I	砂利黄色土 (搬入土)
20	II	黄褐色土塊混入灰色土
40	III	灰褐色土 (鉄分沈澱始まる)
60	IV	鉄分混入砂質灰褐色土
100	V	褐色土(マンガン沈澱始まる)
120	VI	黄褐色土塊多量混入褐色土
140	VII	褐色土(Vよりマンガン沈澱物なし)
160	VIII	茶褐色土 (クリアーな層)
180	IX	暗黄褐色土
200	X	黄褐色土
	XI	暗褐色土 (下部は砂質)
	XII	砂質青褐色土
300 (cm)	XIII	砂礫層

第1検出面
 第2検出面
 第3検出面 (写真のみ)
 第4検出面



- 第1検出面
- 第2検出面
- 第4検出面

第5図 遺構配置(2)・土層概略

第2節 遺 構

1) 住居址

第1号住居址

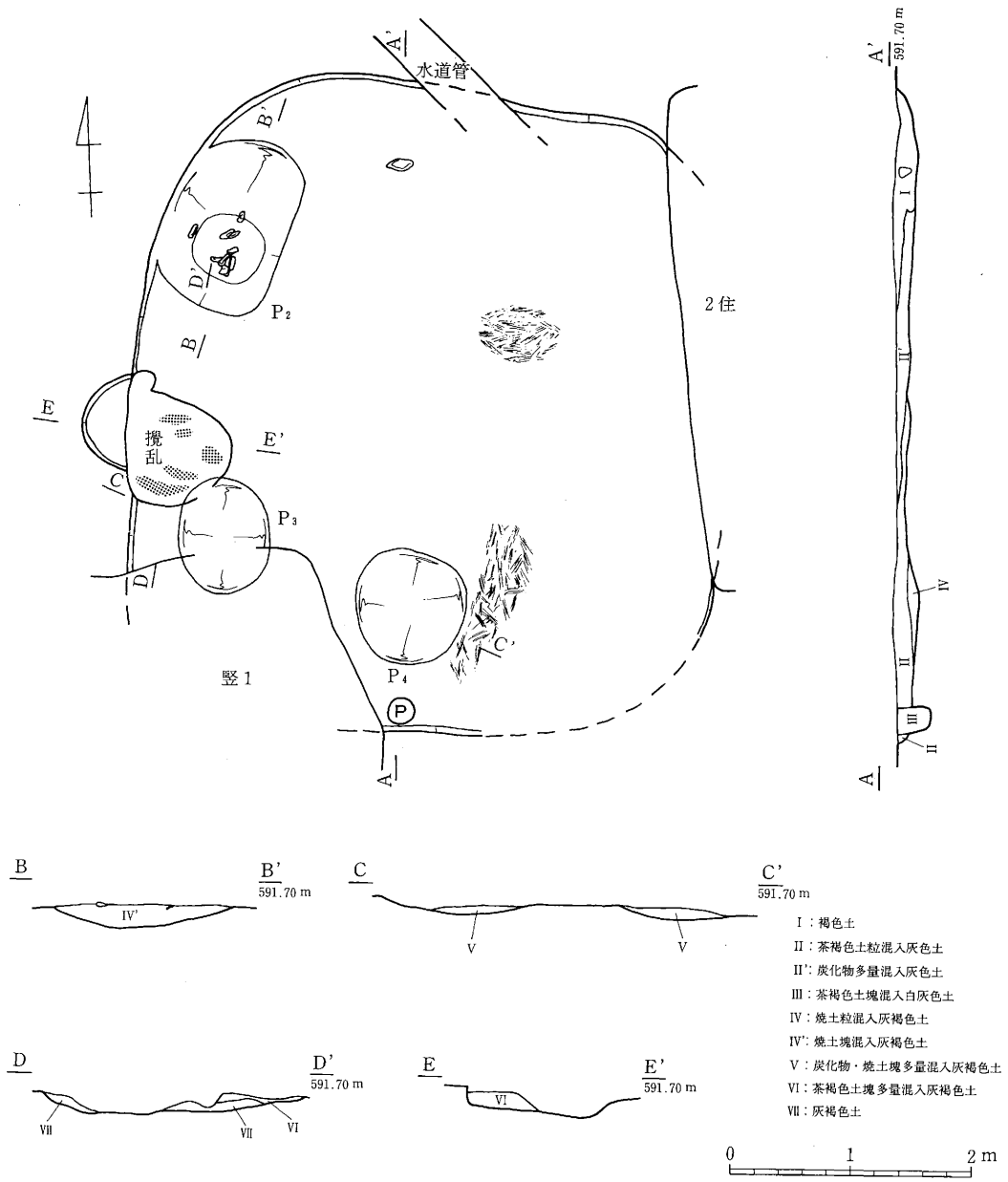
1地区第2検出面西部に位置する。第1検出面で土壌1を調査中にその存在が分かったものである。周囲の検出面は鉄分が沈澱し、茶褐色土粒が多く入るやや灰色っぽい褐色土でプランは明瞭に分かる。東部と南西部、南東部は2号住居址、竪穴状遺構1そして土壌1にそれぞれ小さく破壊されていた。又、上部にはかなり以前の砂場、さらに水道管が本址床面を壊して布設されている。規模は5.2×4.7m。よく残っている北西隅から隅丸方形と考える。壁は低く北側で13cmと、明瞭に検出できた。床面は中央部とその周辺が堅く良好、又炭化物、焼土塊等も各所に散在する。カマドは西壁中央部にあったと思われ焼土が残っている。砂場とした際に大きな石を数個ぬいたと考えられる痕跡がみられ、石組カマドであったと推定される。主軸方向はN-85°-Wを示す。ピットは、大形の3ヶがあるが、いずれも浅く柱穴としての用途ではない。遺物は、P₁周辺にやや多出する程度であった。本址の時期は、出土した須恵器坏、土師器甕等から奈良時代前半と推定される。

第2号住居址

本址は1号住居址の東側にある。覆土中には上面で土壌2・3があり、特に土壌2は深い為、水道管と共に本址床面を破壊している。覆土は1号住居址より灰色が強く、プラン・切合等は非常によく分かった。規模は、4.3×4.8mで方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを示す。壁高は12~18cmを測り、床面は鉄分の沈澱が目立ち非常に堅い。南半部は礫層上に土を乗せている。カマドは北東隅に設けられ数個の石を用いた石芯粘土カマドである。現状は天井部に使用していた平石が床面に転入し、焼土もカマド前床面に広がっている。ピットは南東隅に1ヶ47×31×15cmがある。柱穴としては少し外側すぎる。尚、遺物はカマド袖部に完形の土師器坏が正位で出土した。土師器坏、灰釉陶器碗等の出土より本址の時期は平安時代後期に位置付けられる。

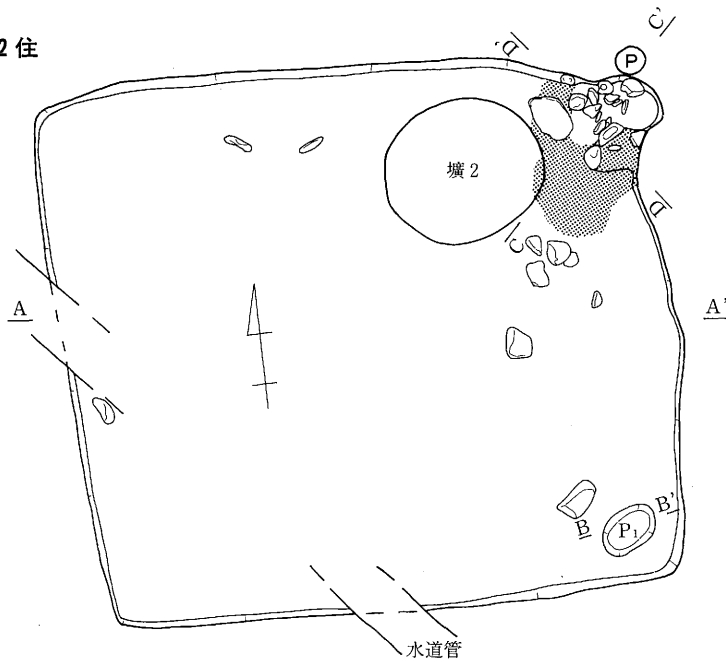
第3号住居址

当初第1検出面にて、明瞭にプランが確認できたのは東側のみであった。その為トレンチを入れ約30cm下の床面を確認し、第2検出面近くまで下げて調査した。プラン確認の結果、北側は用地外に入っており、本址上部に溝3が南北にあった。周囲は鉄分を含む褐色土で砂質の土が覆土として入っていた。規模は東西で5.2mで、壁高は20~21cm、南側壁及び床面は砂礫層中に造られている。他は土質で床面は堅く良好であった。ピットは37×34×13cmが1ヶあるが深さからして主柱穴ではないと考える。遺物は、土師器坏、灰釉陶器碗等が出土した。それらより本址の時期は平安時代後期のものと考えられる。

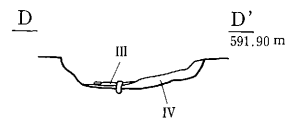
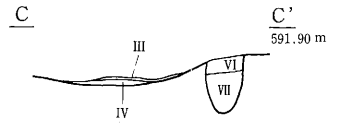


第6图 第1号住居址

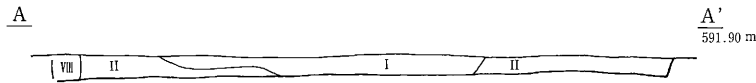
2 住



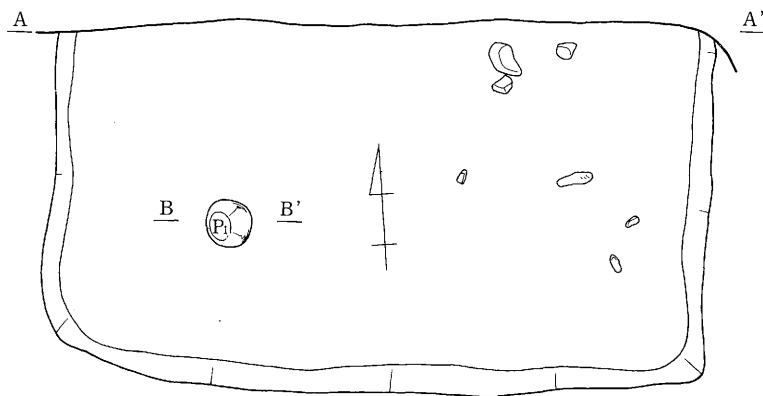
B B' 591.70 m



- I: 鉄分多量混入砂質灰色土
- II: 砂質灰色土
- III: 茶褐色土粒・焼土塊混入砂質灰色土
- IV: 炭化物多量混入砂質灰色土
- V: 鉄分少量混入砂質灰色土
- VI: 明灰褐色土
- VII: 灰褐色土
- VIII: 灰色土塊混入褐色土 (水道管)

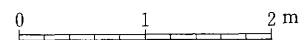
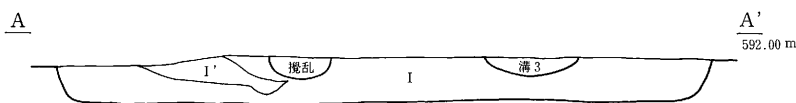


3 住

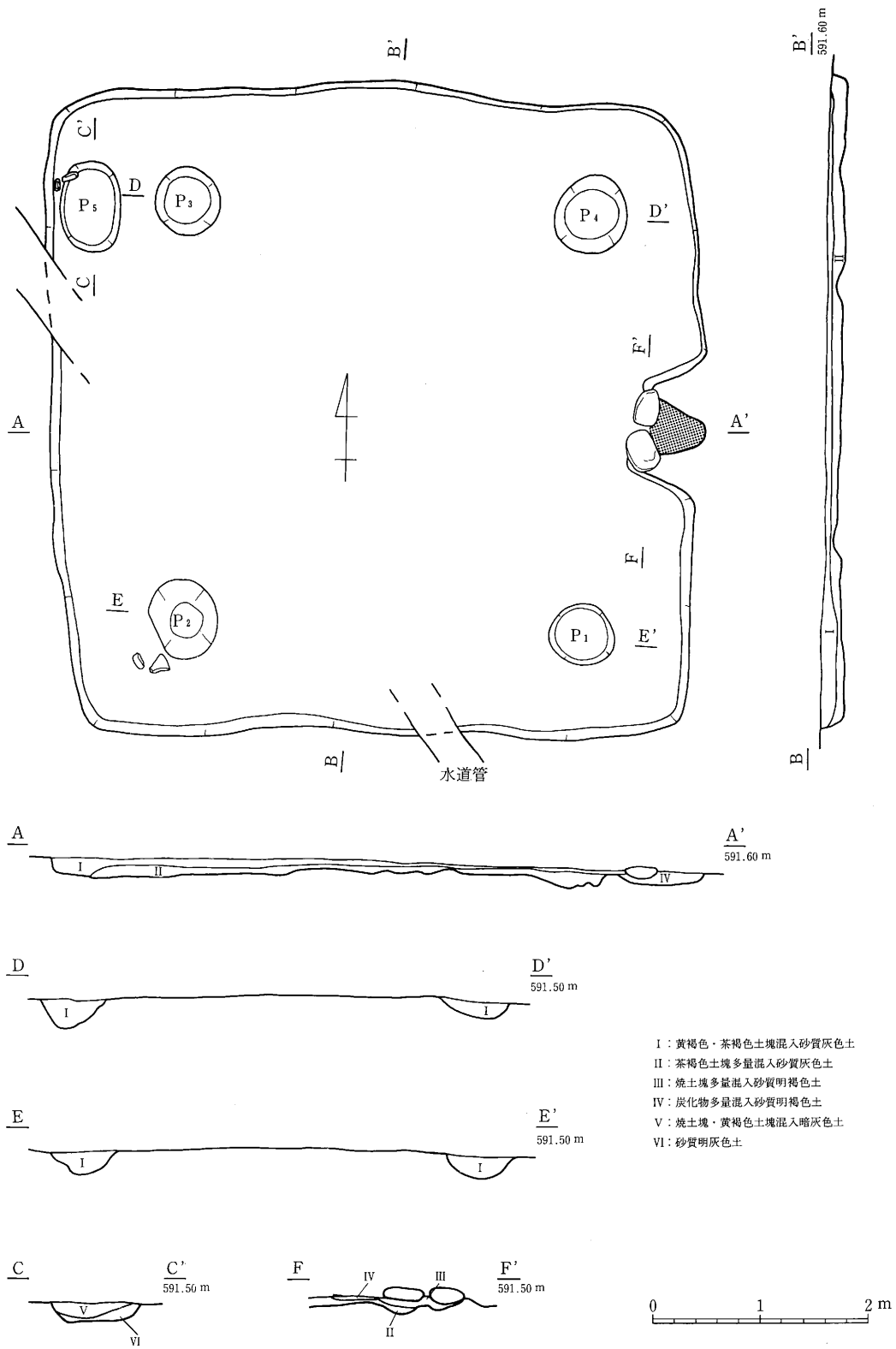


B B' 591.70 m

- I: 鉄分混入暗砂質土
- I': 鉄分多量混入暗砂質土
- II: 鉄分・炭化物少量混入砂質灰色土
- 溝 3: 灰色土



第 7 図 第 2・3 号住居址



第 8 图 第 4 号住居址

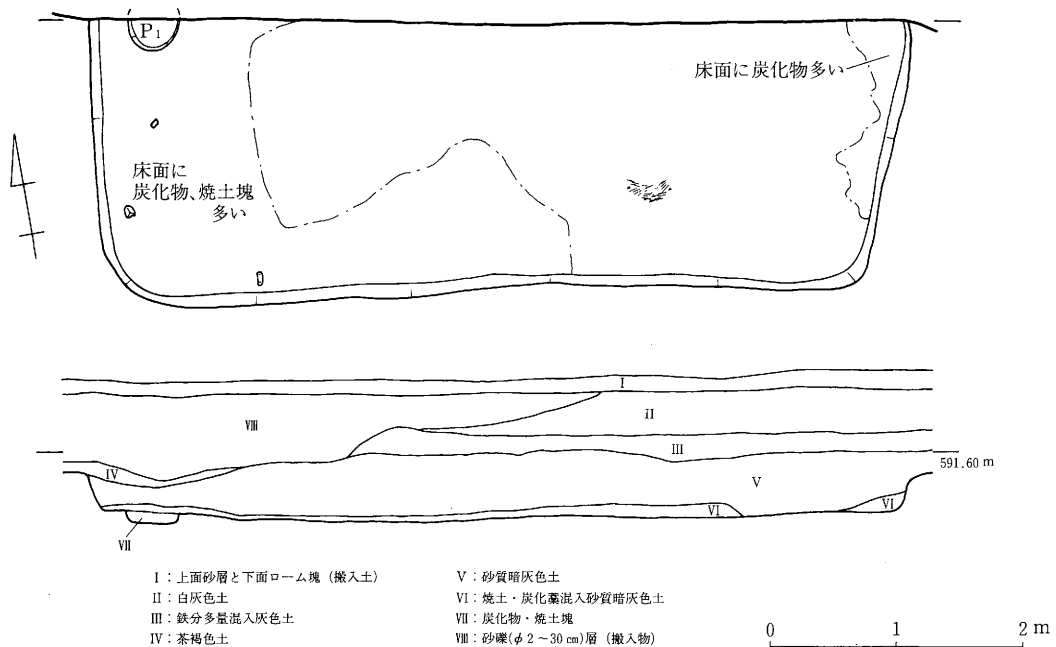
第4号住居址

2地区第2検出面北西部に位置する。検出面は褐色であるが、本址覆土は明灰色で砂質が強く非常に掘りやすく、他の住居址には全く見られない。北西部を土壌12に小さく壊され、又水道管が床面を破壊しながら通っている。規模は5.9×5.9m、プランは方形、N-90°-Eに主軸をとる。壁の上面は明瞭であるが、下部から床面にかけては不明瞭である。床面は砂質土ないし細礫層直上であり、ブロックの入った土をとらえたが全く堅さは感じられない。カマドは東壁中央部に位置する。大きな平石は袖石として使用されたものが内側に倒れたと考える。焼土は施設の内部に狭い範囲でみられた。ピットは5ヶありこのうちP₁~P₄は、直径50~70cm、深さ15~27cm程あり、位置より支柱穴とみたい。又北西隅に位置するP₅は約20cmの深さで、このピットと壁の間より本址出土遺物のほとんどが得られた。本址の時期はその出土した土器より、古墳時代後期末のものとして推定される。

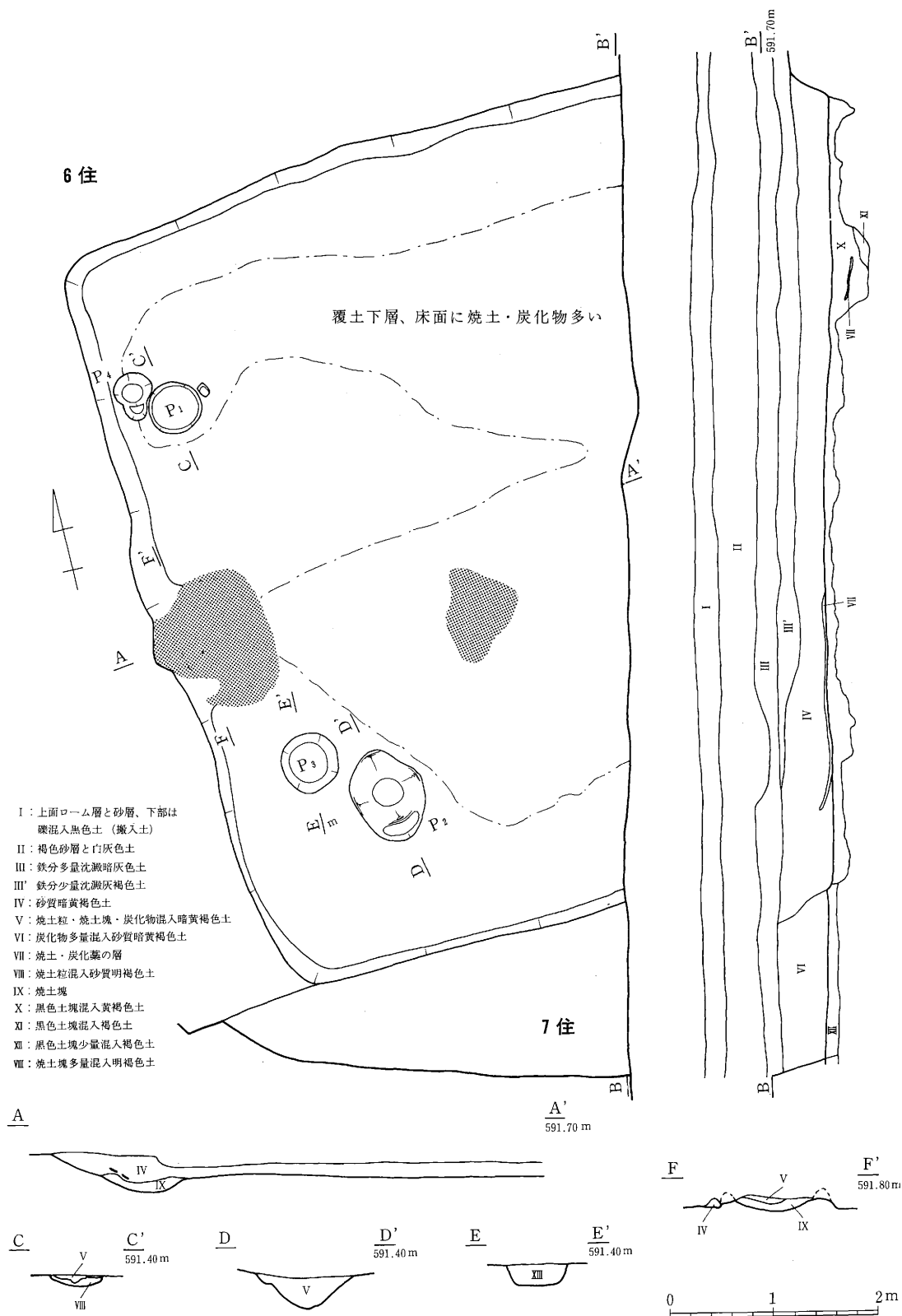
第5号住居址

1地区第3検出面中央部に位置する。北半部は用地外となり4割程度の調査であった。遺構の上層部分は、グランド排水用の直径2~30cmの礫が多量に詰め込んであった。検出面は砂質黄褐色土で、本址覆土は褐色の強い砂質暗灰色土である。規模は東西6.5m、壁高は14~25cm程を測る。床面には住居址中央部を除き、壁際に広くワラ状の炭化物が残っており焼土も各所に点在するが軟弱な状態である。遺物は南西部分にやや多くみられた。カマドの確認はできなかったが、P₁(直径40cm)がありこの中と周囲に多量の焼土がみられる事から、同ピット脇にカマドが存在したと推定される。

遺物は、須恵器蓋・坏、土師器坏・甕等が出土しており本址は古墳時代後期末のものと思われる。



第9図 第5号住居址



第 10 図 第 6・7号住居址

第6号住居址

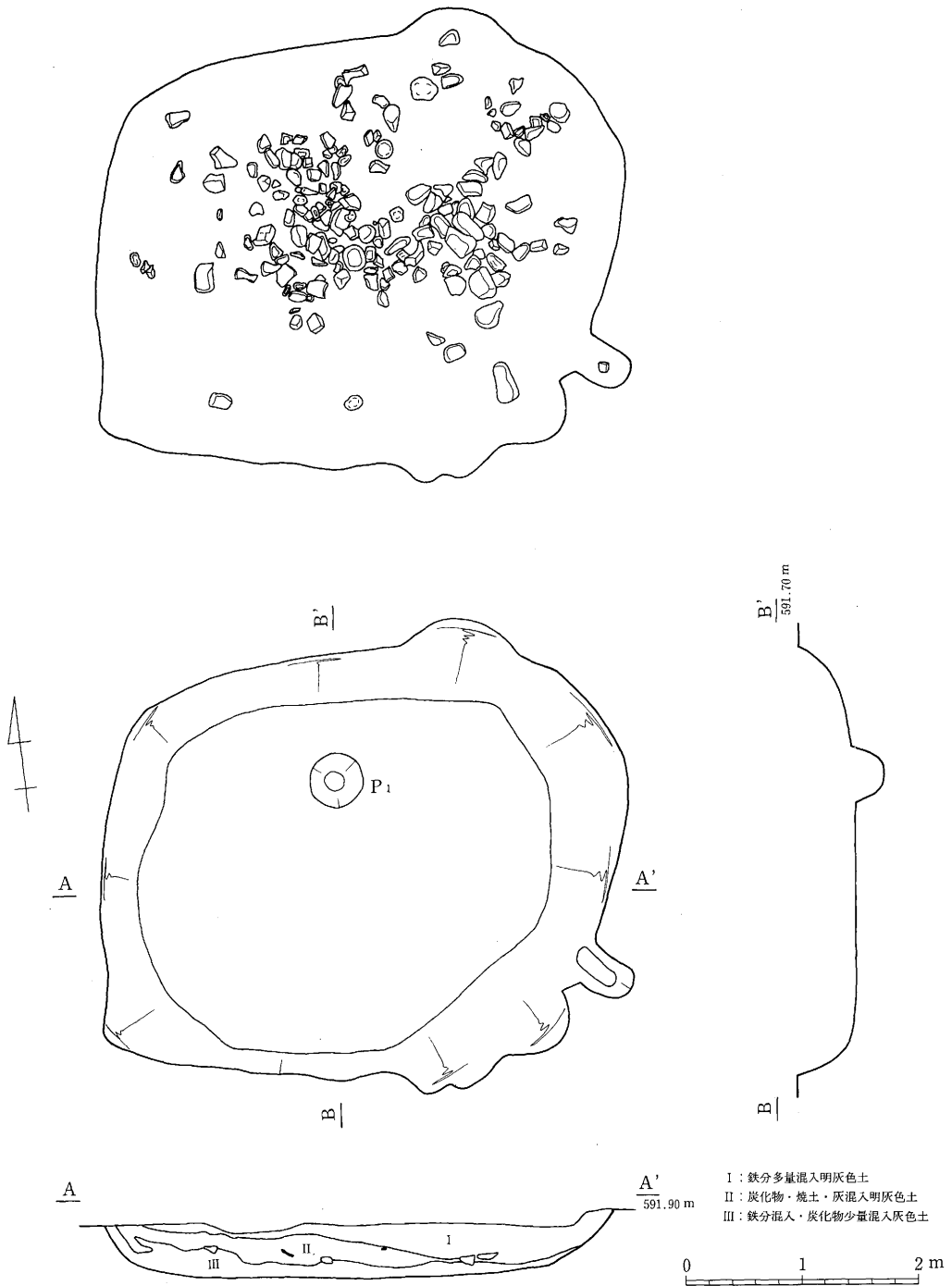
1 地区東部に位置する。第2検出面で遺物が出始め、第3検出面より約20cm程高いレベルで、褐色土に落ち込む砂質の暗茶褐色土を本址の覆土としてとらえた。東側は用地外となり、全体の7程を調査し得た。規模は南北7.7m、東西はもう1m程広くなろう。プランは方形で主軸方向はN-98°-Wである。壁は黄褐色で検出面からは20cmの残存高であるが、東側で土層をみると45~70cm掘り込んで5~20cm程土を埋め戻し床面をつくった構築作業をうかがう事ができる。その結果、北側で35cm、南側で50cmの壁高をもつ。床の状況は、焼土とワラ材様の炭化物が住居址中央部にみられた。床面は堅くない。遺物は今回調査した住居址の中では量的に多いが、特別な出土状況はみられない。カマドは西壁中央にあり、小さな粘土袖を付属させている。焼土もやや多量に残る。ピットは4ヶあるがP₁・P₃は焼土塊を含む。P₂は2段底となっており、小形すぎるP₄も含めすべて柱穴とはなり得ない。本址の時期は、その出土土器より古墳時代後期に位置付けられる。

第7号住居址

6号住居址を検出している際、南側に狭い範囲を確認した住居址である。東側は土層を観察すると、6号住居址に多量に見られる炭化物が本址に全く含まれていない。若干北部を6号住居址に破壊されており、相互の床面差は5~10cmである。床面は黄褐色土で堅くはない。遺物も僅かではあるが得ている。尚、焼土・ピット等は全く検出していない。

住居址一覧表

住居 No.	平面形 大きさ (南北×東西m)	主軸方位	面積(m ²)	残存 壁高 (cm)	カマド		ピット	遺物 (数字は土器番号)	備考(切合)	時期	図
					位置	形態					
1	隅丸方形 5.26×4.72	N-85°-W	24.39	7~13	西壁中央	石組か	3	1~9	2住・竪1・土壇1に切られる	奈良前半	6
2	方形 4.32×4.88	N-90°-E	20.07	12~20.5	北東隅	石芯	1	10~21	1住を切り土壇2に切られる	平安後期	7
3	隅丸方形 (2.85)×5.20	?	14.78	20~21			1	22~24	北半は用地外	平安後期	7
4	隅丸方形 5.94×5.96	N-90°-E	15.89	11~17.5	東壁中央	石芯粘土袖	5	25~28		古墳後期	8
5	隅丸方形 (2.20)×6.50	?	13.57	14.5~25			1	29~34	北半は用地外	古墳後期	9
6	方形 (4.85)×7.66	N-98°-W	69.35	12~24	西壁中央	粘土袖	4	35~49	7住を切る 東半は用地外	古墳後期	10
7	方形?	?		0					6住に切られる 大半が用地外	?	10



第 11 図 豎穴状遺構

2) 竪穴状遺構

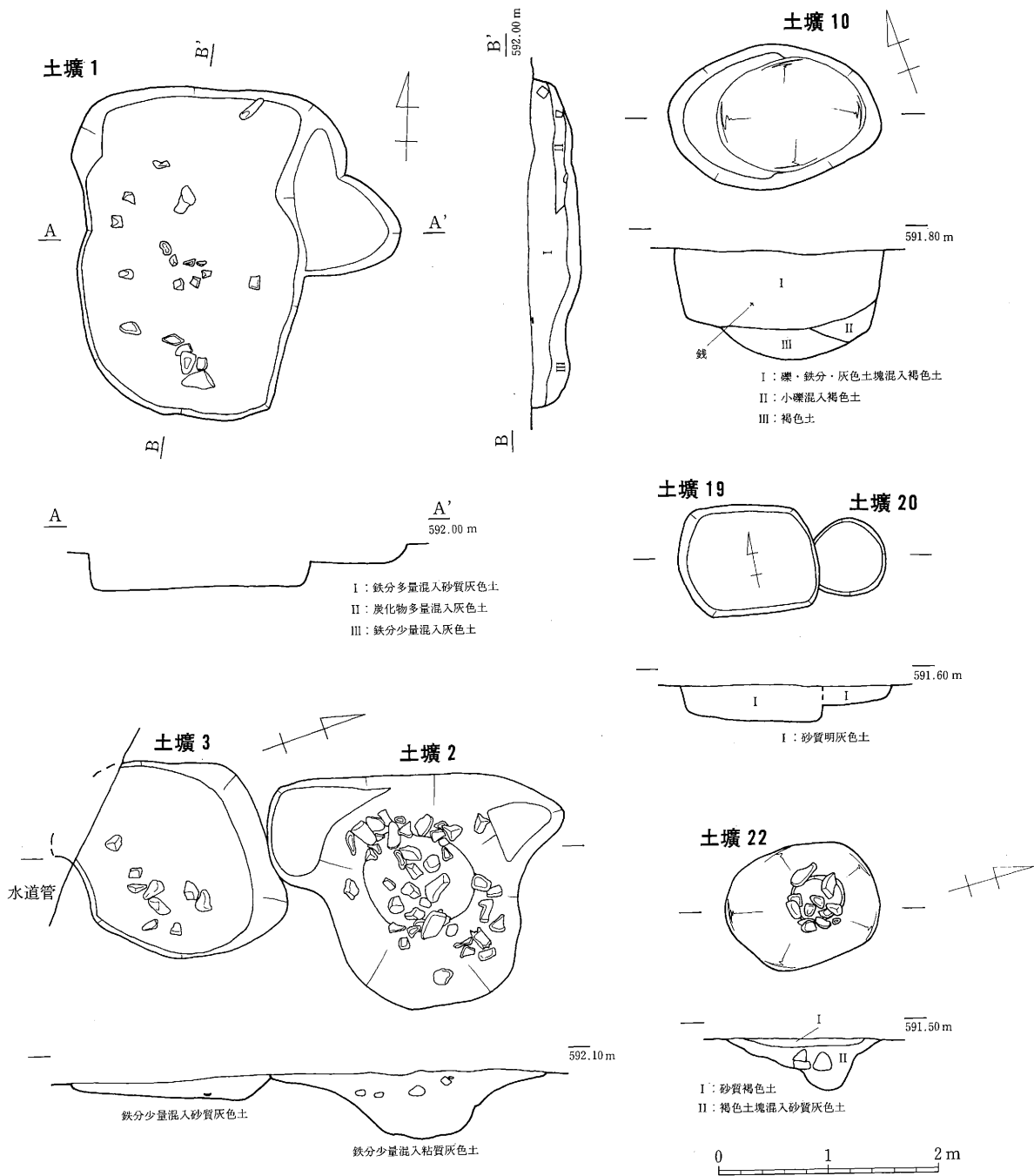
1地区第1検出面西側に位置する。周囲の検出面は褐色土で灰色土が落ち込んでいた。古い砂場が本址北側を覆っており、それを除去してプランを確認した。

概形は隅丸方形を呈し、長軸方向はN-82°-Wを測る。中には小児頭大以上の大きさであったと思われる円礫が鋭く割れて多量に入っていた。これらは遺構の中央に低く、周辺に高い位置、つまりレンズ状となる自然堆積中に入れられた状況を示している。これらと共に炭化物が多量にあり、礫は熱を受けたものである。壁は茶褐色を呈し、グラグラと落ち込む。床面は地山の礫が露出するが、平坦で鉄分沈澱し固く良好。南東部に突出する中段があり入口部が存在したか。ピットは中央北寄りに直径46×深さ20cmの1ヶがあり柱穴と思われる。

3) 土壙・墓址

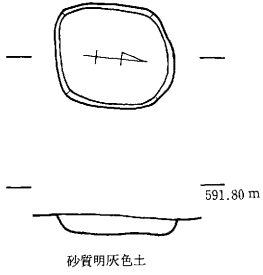
土壙は1地区で18基、2地区で6基の総数24基を検出した。1地区では全域に点在しているが2地区では北寄り四半部のみであった。第1検出面に15基、第2検出面6基、第3検出面3基を数えた。概して平面形は円形が半分程である。覆土は砂質状のものが特に多く土色では灰色が半分以上、褐色が3割程であった。これらのものを断面形、覆土の状態、周囲の遺構、遺物から用途別に分類してみたい。学校の施設の一部として土壙6（以下番号のみ）がある。これは径85×81cmの円形で、この中に大甕が埋設されていた。ここに校舎があった時に使用された便所であろう。6に隣接してピット5と5がある。P₅には、石灰がまだら状に入っており、以前は消毒のために石灰をまいた事など考え合わせればこれらは6と同じ用途で使われたのであろう。また学校の教練用具を設置したと思われる15、16がある。両者とも近接して覆土も同一である。なお22の南東にある一群のピットは、形状、並び方ピット間の距離が15・16に類似しておりこれらと同じ用途と考えたい。ゴミ穴、廃棄用の穴として12・13・14・22がある。規模は1.3~2mと大形で深さは14~59cmである。これらにはガラス・土瓦・雨どいがあった。10は楕円形、径180×129cmである。壁がほぼ直に落ち込み底面までは1mと深く掘り込まれていることから墓穴と考えたい。遺物として瓦の小片2点に寛永通宝が得られた。その他の土壙は用途は不明であった。ただ8と9は平面形・規模が同様に断面形も酷似しており使用目的を一にしたものである。次に同一検出面上の周囲の遺構や遺物から時期ごとに分けてみたい。昭和に属するものとして15・16、昭和~明治には5・6・12・13・14・22、江戸時代には10が属する。その他のものは、調査した住居址の範囲内の時期を与えられよう。

墓址は、1地区第1検出面の中世の火葬墓1基のみである。大部分が重機で削られてしまったため5cm程しか覆土が残存しなかった。プランは楕円形で西壁に小突出が設けられていた。長軸方向はN-16°-Eを示す。焼土は輪部に沿って周壁に見られ特に西壁は顕著であった。骨は南の一部分を除きほぼ全域に多出した。遺物は骨が多出した範囲に古銭が4点中3点底面から、1点は下層から得られた。

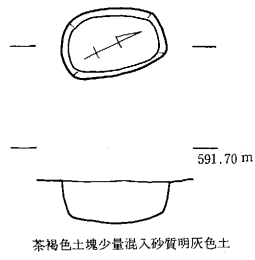


第 12 図 土壤 (1)

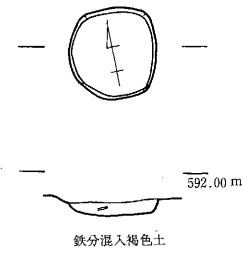
土壙 17



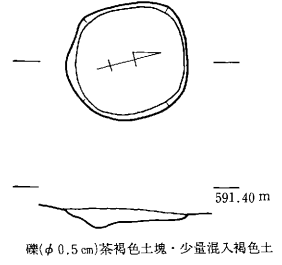
土壙 21



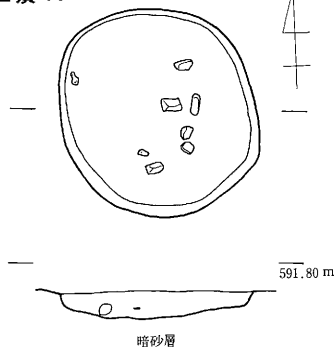
土壙 7



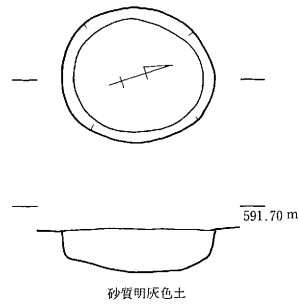
土壙 25



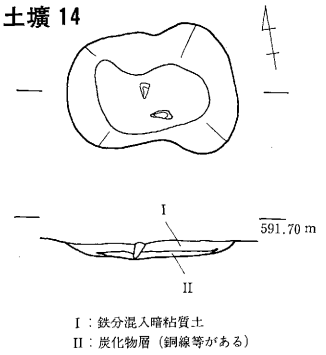
土壙 13



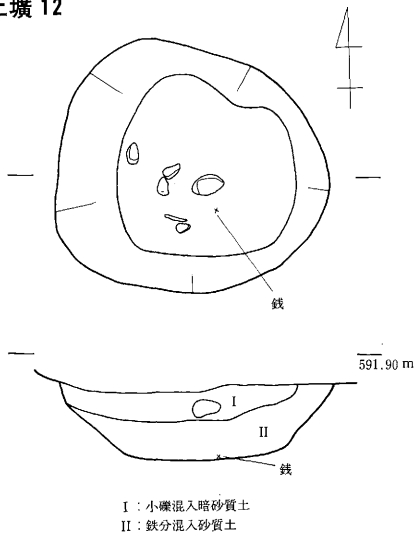
土壙 18



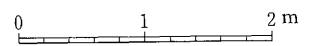
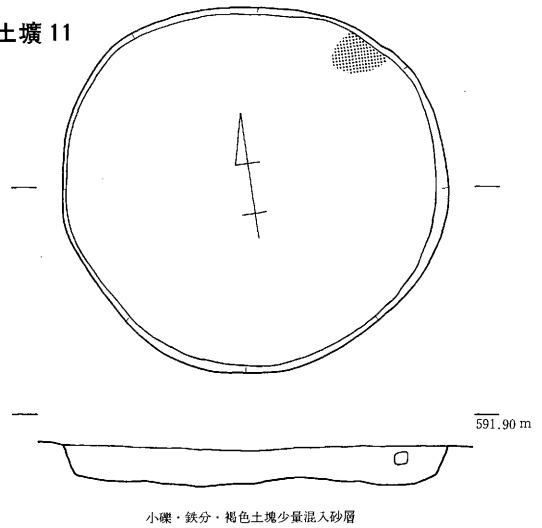
土壙 14



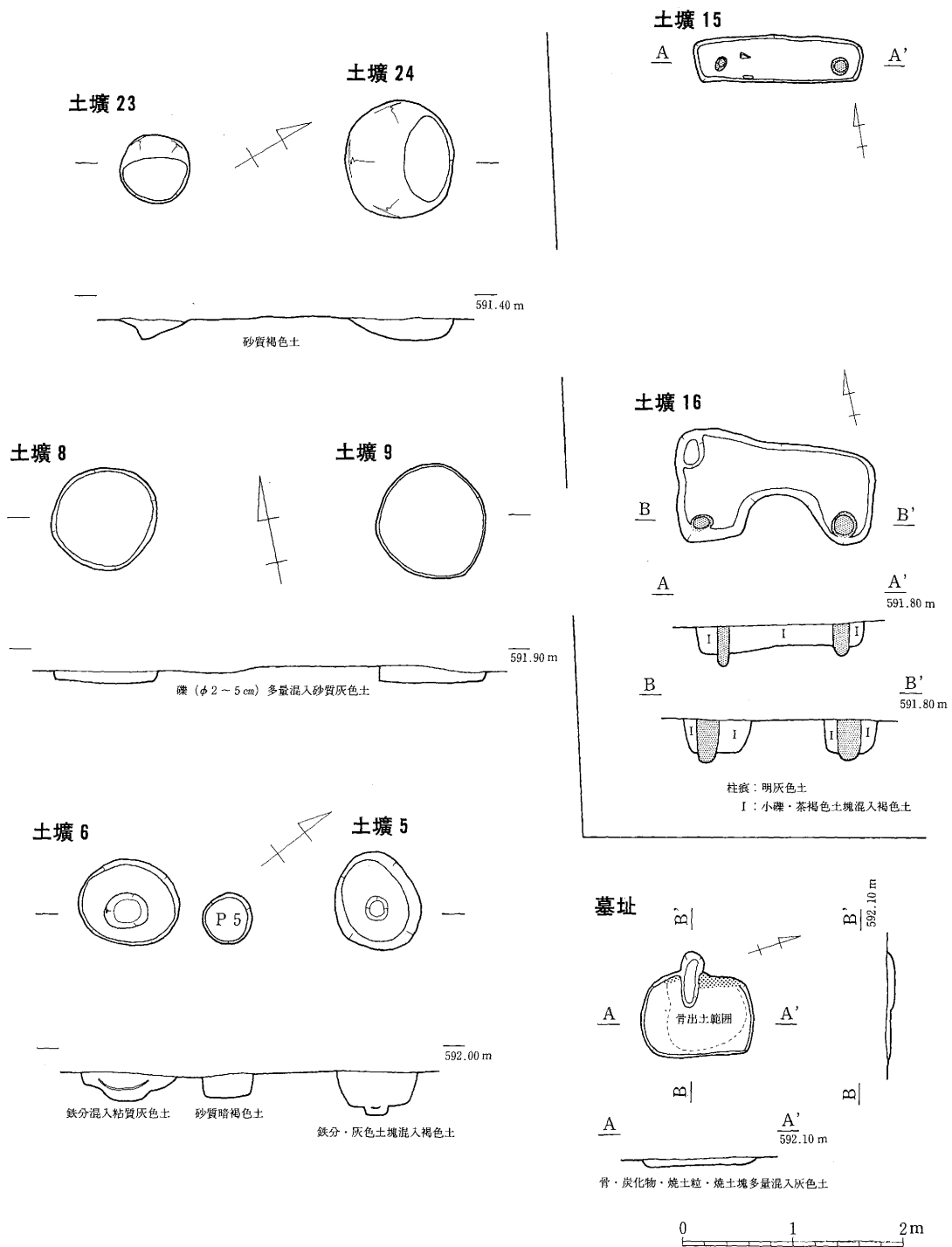
土壙 12



土壙 11



第 13 図 土壙 (2)



第 14 図 土壌 (3)・墓址

土壌・墓址一覧表

番号	地区	検出面	規模 (cm)	長軸方向	遺物	備考
			長径×短径×深さ			
1	1	1	300×282×48	N-6°-E	土師・須恵・釘	東壁一部中段の張り出し
2	1	1	235×220×61	N-18°-E	土師・須恵	塋3を切る、拳～小兒頭大の石、内部全面鉄分沈殿
3	1	1	187×170×21	N-18°-E	土師	塋2に切られる
5	1	1	88×78×36	N-56°-E	土師・須恵	二段底、6と使用目的同じ
6	1	1	85×81×27		陶器・瓦・ガラス	#
7	1	1	71×70×15			
8	1	1	96×92×16			塋9の隣、規模9と同様
9	1	1	103×100×17			
10	1	1	180×129×102	N-72°-W	土師・須恵・瓦・古銭	覆土は周囲の土色が混合したもの
11	1	1	305×290×29	N-82°-W	土師・須恵・ガラス・大鉄片・釘・硯	覆土中層に焼土
12	2	1	215×194×59	N-90°-W	別記	床面にまばらに厚さ6cmの焼土
13	2	1	163×153×28	N-7°-W	#	
14	2	1	133×105×14	N-78°-W	土師・瓦	
15	2	1	150×42×16	N-78°-W	埴器	柱痕跡2個、16と共に使用
16	2	1	179×100×40	N-79°-W	土師	#
17	1	2	93×81×16	N-8°-E		
18	1	2	118×109×34	N-17°-E	土師	
19	1	2	125×100×37	N-78°-W	土師	塋20を切る
20	1	2	69×60×14			塋19に切られる
21	1	2	82×56×32	N-28°-E	土師	
22	2	2	139×111×47	N-16°-E	瓦	円礫中層に多量
23	1	3	64×64×19		土師	
24	1	3	107×102×23		土師・須恵	
25	1	3	95×90×13			
墓址1	1	1	103×97×5	N-16°-E	古銭	

記、土塋12の遺物は土師・陶器・瓦・ガラス・とい・鉄塊・古銭・貝・炭であり、土塋13の遺物は土師・須恵・陶器・瓦・ガラス・釘・土管・雨どい受けである。

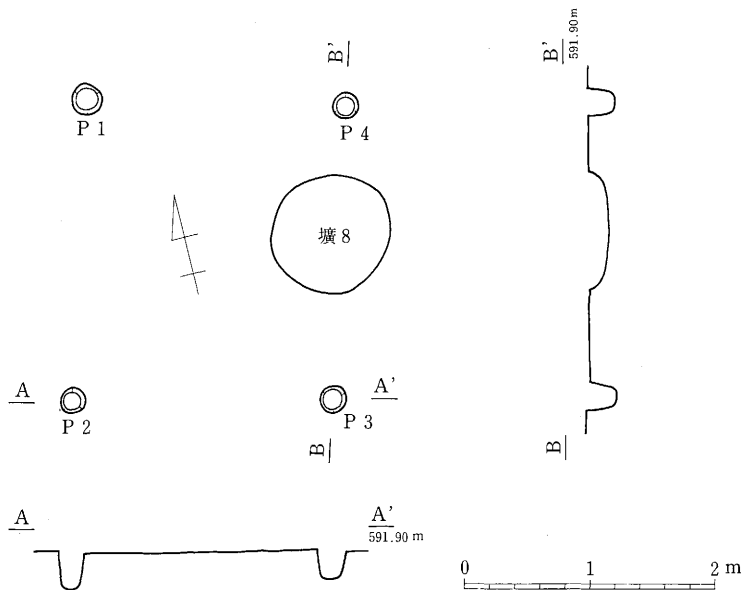
建物址一覧表

No	平面形 柱配り	主軸方向	規模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模 (cm)				柱穴平面形	柱穴規模 (cm)				柱穴平面形
					No	長径	短径	深さ		No	長径	短径	深さ	
									1					
2	長方形 側柱式	N-16°-E	4間×2間? 6.2×2.8?	桁1.4~1.8 梁1.1~1.6	6	133	97	23	楕円形	11	90	77	15	不整円形
					7	135	117	16	不整円形	12	108	75	6.9	不整円形
					8	84	81	20.3	円形	13	86	82	17	円形
					9	78	69	18	円形	14	91	75	16	楕円形
					10	105	97	21	不整円形	15	72?		19	

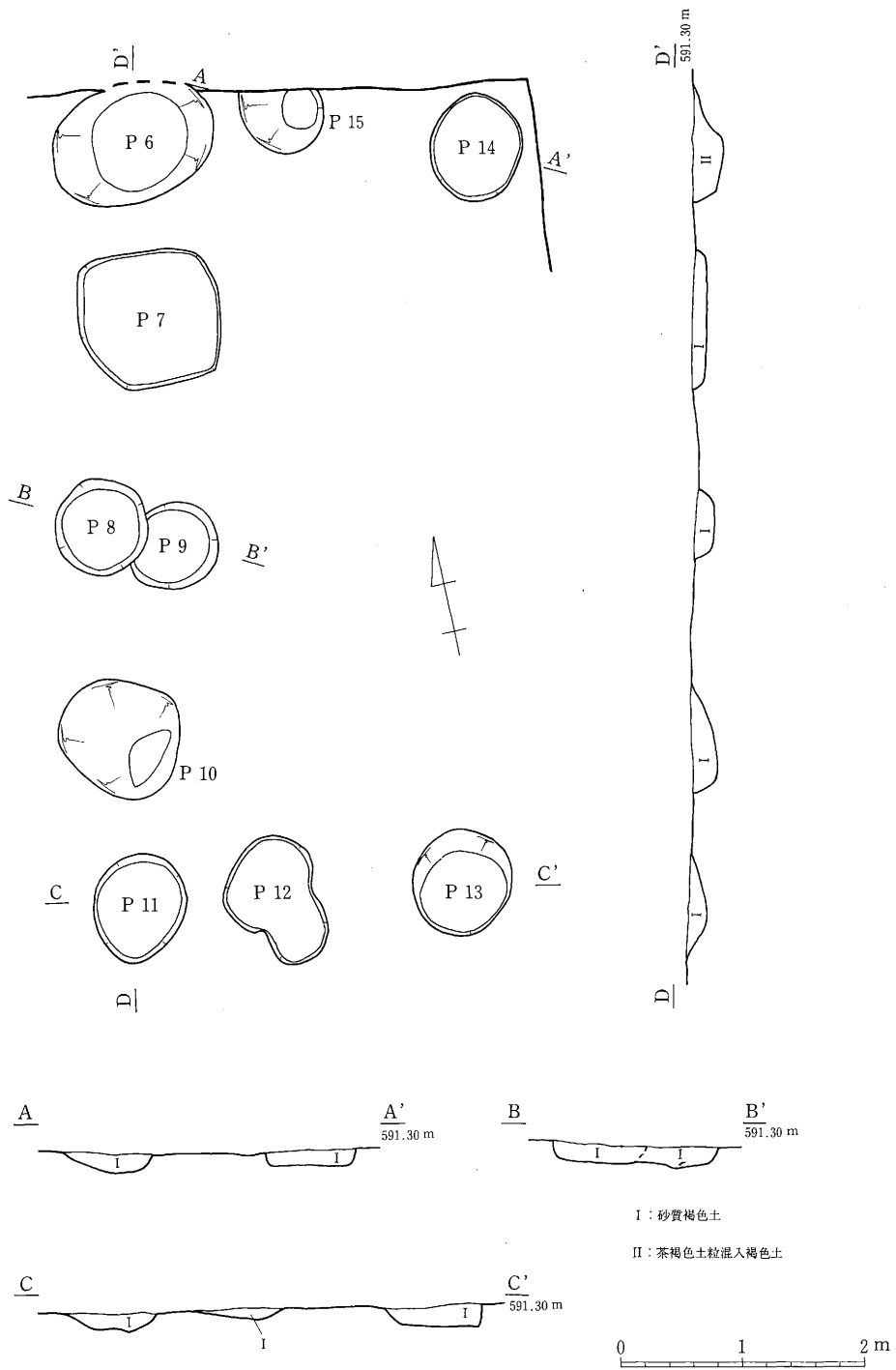
4) 建物址

建物址は、1地区の第1検出面と第3検出面にそれぞれ1棟ずつ検出した。構造はどちらも側柱式であった。1は発掘区中央やや東寄りに位置する。主軸方向はN-18°-Eを示す。規模は1間×1間で、平面形は桁行が梁行より30cm長い長方形である。ピットは円形で規模は20~25cmと小形である。覆土は灰色で柱痕は検出できなかった。なお、遺物はどのピットからも得られなかったため、おおよその時期しかわからないが、同一検出面にある竪穴状遺構よりみて中世以降に属すると考えられる。

2は発掘区東方部にあり一部のピットは区域外である。主軸方向はN-16°-Eを示す。規模は4間×2間であるが、東西の梁行は東に続く可能性があると思われる。ピットは、円形・楕円形もしくは不整形を呈する。規模は直径80~140cmを測りピットごとにばらつきがあるものの1に比べてかなり大形である。覆土は砂質褐色土でP6のみ茶褐色土粒を含む褐色土となる。遺物は数個のピットより土師器の破片が得られた。時期はこの遺物と検出面の深さから考えて、奈良時代頃に属すると理解したい。



第15図 建物址 1



第 16 図 建物址 2

5) 溝址

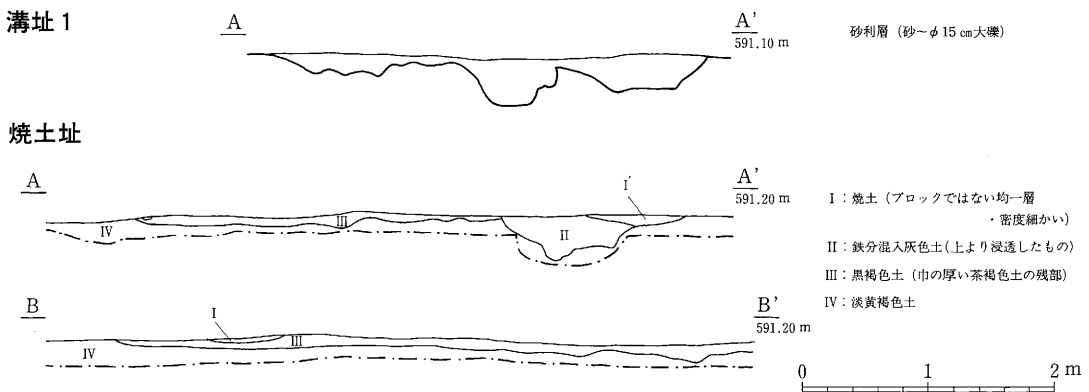
溝は2条を検出した。このうち溝1は2地区にあり、西から東へと大量の礫を伴っている。第1検出面から第4検出面まですべてに現われ、検出面を下げる毎に下底近くせばめられる。溝際には多量の遺物も含んでおり、これらの遺物は2地区遺物集中出土地点として扱っている。遺物は狭い範囲にまとまるが特定のプランは見当たらず、ただ周囲の砂地を緩やかに浸食しただけの様相であり、自然流下した溝1が付近で古墳時代後期の遺構を破壊して運んできた遺物を流れのおだやかな所へ残していったものとする。なおこの溝の細部に関しては地形と地質の項目にゆずりたい。

溝3は3住覆土中に検出した水路址である。(7図参照)北から東へ流れ、巾75cm、長さ13m程を知り得た。溝下底は僅かに砂質で途中から東西の溝と合流、あるいは分流している。(図4) 覆土は灰色で中世に含まれよう。

溝2は2地区4検、南東隅に現われた黒褐色ベルト(図5)である。東西、南北部分で土層を観察したが、ここは南東部へ向かって傾斜している所へ黄褐色土が堆積し、両者が重なった部分で横方向へ切った(検出した)為、その断面が露出しているものと判断(図18、2地区トレンチ)、微地形の変化で溝ではない。

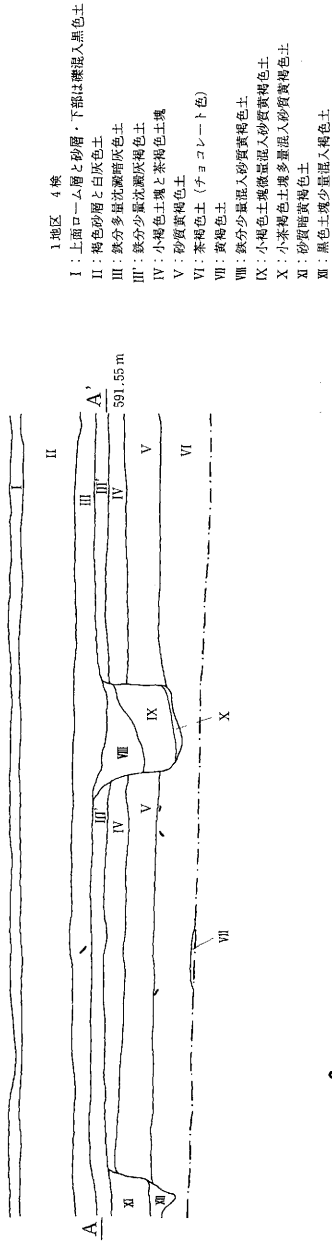
6) 焼土址

2地区第4検出面上に見た被熱部分をいう。この焼土はブロック状の集合しているものではなく、カマド下部に見られる状態と同じである。焼土は約2m離れて2ヶ所あり円形で直径60ないし80cmに見られる。周囲は黒褐色土が広がり、南東はコーナーとなって方形のようである。この土は緻密でしまりよく、住居址の覆土とは明らかに異なる。下層は暗黄褐色から黄褐色となり判然と分層できず、更に注意しても床面と認める箇所も全く見当たらない。なお焼土中から小片乍ら50片程の遺物を得た。恐らく黒色土層中に住居址が設けられ、その下部が痕跡として残ったものとする。なお北側の溝1はこの黒褐色土より後のものであり、存在したであろう遺構より新しいものと思われる。又1地区第4検出面上にも緻密な黒色土が広がり、遺物がその中から得られている。これについてはまとめて少し触れたい。



第17図 溝址1・焼土址トレンチ

1 地区トレンチ 1

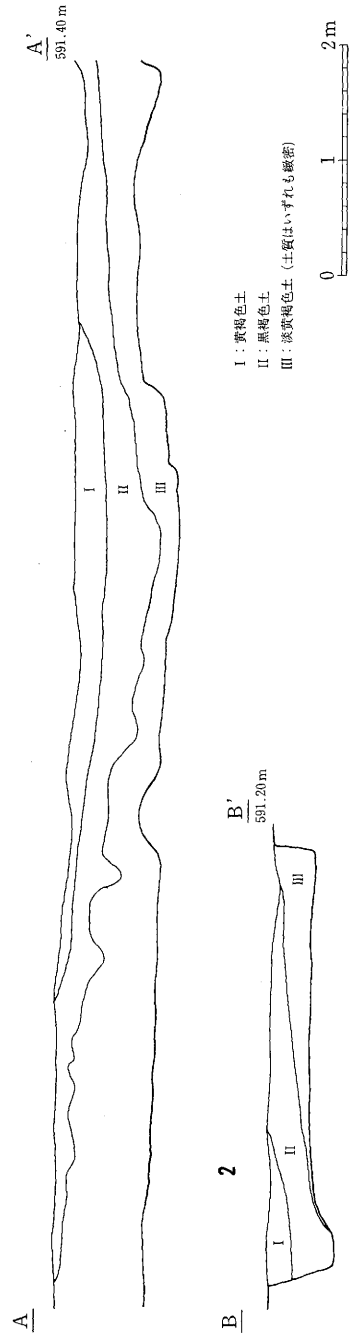


1 地区 4 條

- I : 上面ローム層と砂層、下部は雜混入黒色土
- II : 褐色砂層と白灰色土
- III : 鉄分多量流瀝灰褐色土
- IV : 鉄分少量流瀝灰褐色土
- V : 小褐色土塊と茶褐色土塊
- VI : 砂質黄褐色土
- VII : 茶褐色土 (チョコレート色)
- VIII : 黄褐色土
- IX : 鉄分少量混入砂質黄褐色土
- X : 小褐色土塊微量混入砂質黄褐色土
- XI : 小茶褐色土塊多量混入砂質黄褐色土
- XII : 砂質暗黄褐色土
- XIII : 黒色土塊少量混入褐色土

- I : 眞黒色土
- I' : 漆黒色土
- II : 暗黄褐色土

2 地区トレンチ 1



- I : 黄褐色土
- II : 黒褐色土
- III : 淡黄褐色土 (土質はいずれも緻密)

第 18 図 1・2 地区トレンチ

第3節 遺物

1) 土器 (第19～23図)

今回の調査で出土した土器の量はコンテナ6箱程である。その多くは小破片であるが、遺構出土遺物を中心に極力図化に努め、81点を呈示し得た。これらは時期的には縄文時代～平安時代にわたるが、ここでは各遺構毎に記述を進めたい。

第1号住居址 (1～9)

土師器甕・小形甕、須恵器無台坏・有台坏が器種として挙げられる。土師器甕は口縁部が強く外反し、厚手である。小形甕はハケ目調整の7・8とロクロ成形、カキ目調整の6とがある。6の底部は厚く、雑にナデを行う。須恵器無台坏は底部ヘラ切り痕を残し、回転ヘラケズリは行わない。有台坏は3に所謂「ふんばり高台」が見られる。4の底面にはヘラ記号が見られる。

第2号住居址 (10～21)

器種は土師器坏・埴、須恵器蓋・無台坏、灰釉陶器碗がある。土師器坏は大形の19・20と小形の11・14・16・17・20の2者が存在、後者のうちでも16は他に比べ深い形態である。土師器埴も小径で浅く、体部の立ち上がり直線的なものである。坏・埴はいずれも回転糸切り痕を残す。灰釉陶器碗はやや深い体部で、口縁端部がやや肥厚する。高台は厚く断面は三角形を呈し、回転糸切り痕を残す。尚、須恵器は混入品と考えられよう。

第3号住居址 (22～24)

土師器坏、灰釉陶器碗を図示した。土師器坏は小径で浅く、口縁端部は短く外反する。灰釉陶器碗は2点共釉が薄く、光沢がない。やや腰の張る深い体部、厚い高台が特徴的で、底面は回転糸切り痕を残す。23は外方に肥厚する口縁端部を有し、高台接地面には砂粒様、植物繊維様の圧痕が顕著に残る。24は内面見込みが磨滅、光沢をおびる。

第4号住居址 (25～28)

器種は土師器坏・壺・小形甕、須恵器有台坏が存在する。土師器坏は口頸部ヨコナデ、体部はヘラケズリを行うもので、頸部と体部の境界が稜ないし段をなすものである。壺は体部の張る形態と考えられ、内外ヘラミガキを行う。底面には木葉圧痕が残る。須恵器有台坏は底部回転ヘラケズリ後、断面四角形の高台を貼付する。土師器小形甕は内外ロクロ調整を行い、他の3点より時期の下るものである。

第5号住居址 (29～34)

土師器5点、須恵器2点を図示した。土師器の器種は坏・甕がある。坏は外面に稜を有する30と丸い体部を有する32があり、両者共外面下半部をヘラケズリ、口縁部ヨコナデの後ヘラミガキを内外に行う。32は内面に黒色処理がなされる。甕は長胴形で「く」の字状に外反する口縁部を有する

34と、やや小形で体部が張り、頸部のややしまる33とがあり、いずれも体部にハケ目調整がなされる。須恵器の器種は蓋・無台坏があり、無台坏はやや深い形態を呈する。

第6号住居址 (35～49)

本址は各住居址中では最も出土量が多く、15点を図示し得た。器種は土師器坏・高坏・甕・壺、須恵器坏・蓋が存在する。土師器坏40は半球形の形態を呈し内外へラミガキの後内面に黒色処理を行い、甕は長胴形となるもので大きく外反する口縁部を有する。壺はへラミガキを行い、内面黒色処理がなされる。須恵器蓋はつまみの形態からみて、内面に返りをもつものである。42・43・44は古墳時代前期に遡ると考えられるもので、44はS字状口縁台付甕である。外面の横位羽状のハケ目調整および肩部の横位ハケ目、S字状の口縁部形態を特徴とする。

溝址 (50～54)

土師器坏・甕、須恵器短頸壺が出土している。51は外面わずかに稜を有している。須恵器短頸壺は50の様な形態の他、54は小形で球形の体部を有している。

その他の遺構・検出面 (55～80)

竪穴状遺構1より50のミニチュア土器が、土壙1より土師器甕56が出土している他、検出面より図示可能なものが多く得られている。65は縄文時代晩期の台付土器と考えられる。59・60・62・63・64・74・80は古墳時代前期に帰属し、壺(60・80)、甕(63・64)、台付甕(59・74)、高坏(62)が存在する。60は「折返し口縁」の壺、74はS字状口縁台付甕である。62は外面縦位に入念なへラミガキが施される。80は底面中央が上げ底になり、接地面が輪状となるものである。57・58・61・66～73・76～79は古墳時代後期に概ね比定される。土師器坏(69・70・72)・高坏(68・73)・壺(77)・甕(75)、須恵器蓋(57・58・66・67・79)・坏(61)・埴(71・78)等の器種がある。土師器壺は大形品で、須恵器蓋は内面に返りを有する66・67・79と端部の折れる57の2者が存在、須恵器埴は口縁部外面に2条の沈線を施す点が特徴的である。

最後に各遺構出土土器の年代について触れておく。4～6住は多少の混入品が認められるものの、概ね古墳時代後期末の様相と捉えられる。1住はやや下り奈良時代前半、2・3住は平安時代後期に位置付けられよう。

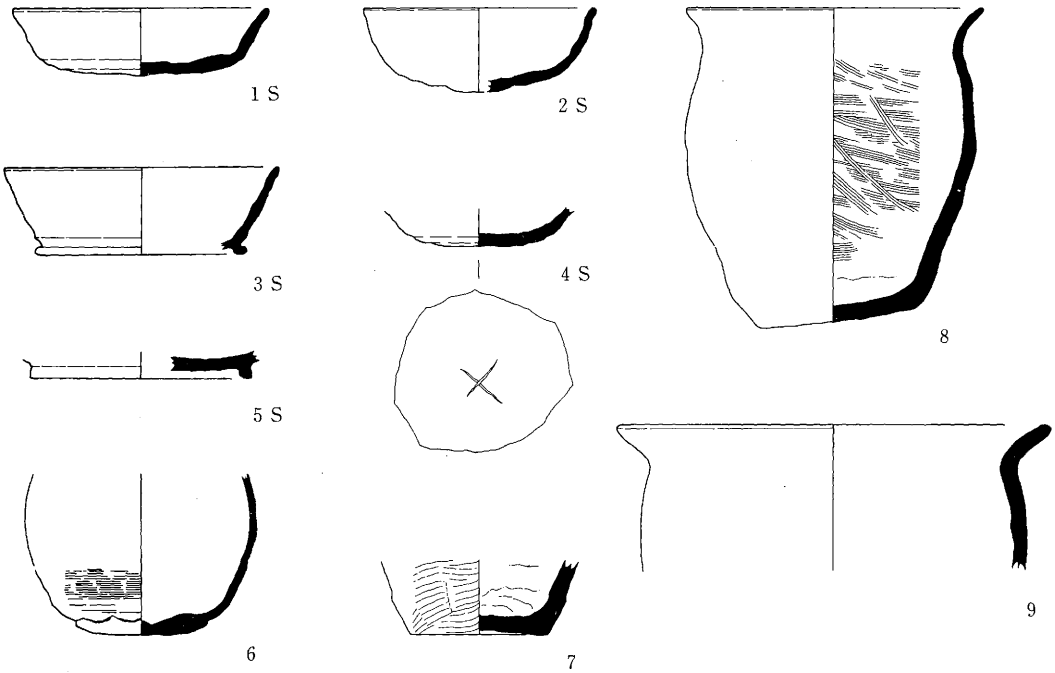
2) 陶磁器

本址出土の陶磁器は、20点であるが、図示したものは16点である。いずれも近代の陶磁器である。6～8は碗で、8は笹の葉の染付碗で紺青のゴスを使っている。口縁内の文様帯は8mm幅の輪郭内に粗いタッチで3本づつの横線をめぐらしている。器形は口縁がやや広がる。瀬戸美濃系である。7は摺絵の浅目の碗で、外形は栗粒状と松葉状の文様がびっしり埋まり、内面口縁の文様帯には葡萄状文を摺ってある。瀬戸美濃系である。6も摺絵の碗で瓦と花の文様で、口縁には蔓草文がめぐっている。素地・釉とも白色で、器形は盃とも言えるものであるが、煎茶茶碗と見たい。5・10・11・12は盃である。5は摺絵の盃で円くまとめた花文を三対に配している。高台は蛇の目高台であ

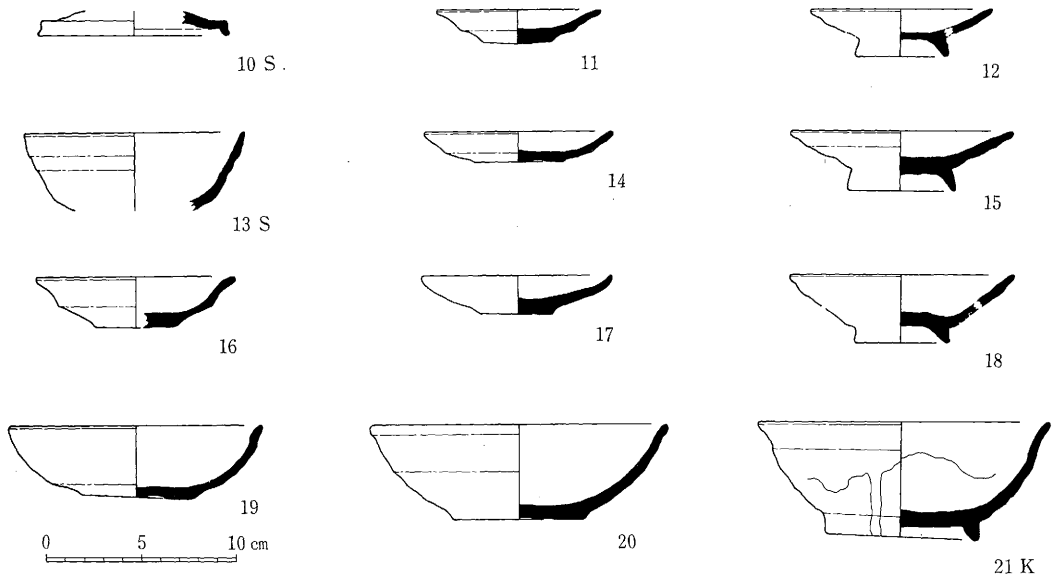
る。釉はややくすんだ薄青色である。瀬戸美濃系である。11は白色の浅い盃で、見込には中央に『東京、越後、銘酒』の墨書があり、右に細く『忝本新掬』と朱書きがあり、左には印面風に『○林○店』らしい字と文様が金色で書かれている。10は11と同様でこの方がやや薄手である。見込みには中央に亀の絵とその下に『浪』とあり、亀浪と読ませ、右には松葉で囲んで『銘酒』とあり、左には『亀田屋』その下に朱印がある。高台脇にかぎ状文があるのは11と同じである。高台内には『山ツ』と読むのか銘が書かれている。亀田屋は島立地区内にある酒造店である。12は浅目のもので摺絵の波文に何箇所かの円文があるらしい。見込みには薄く痕跡をとどめる程度ではあるがはっきりと『島立役場』と書かれている。高台の幅が広く高台内は深くえぐり取ってある。これらの盃の産地は多治見方面かと思われる。14は土瓶の底部である。底は上げ底で火にかかったため茶褐色を呈している。素地は薄黄白色である。内面に白色釉がかかり、それを拭きとったかのようにロクロ目が残っている。産地不詳。4は土瓶の蓋である。茶褐色の釉が厚くかかる。素地は薄茶色である。産地不詳。13は仏飯器で外面は薄緑の釉をかけ、その上に菊花と唐草状文を茶と緑で描いている。瀬戸美濃系。1は小さい鉄釉の摺鉢を模した小皿である。目は7本で粗くたてられており、底はロクロで巴状に削っている。素地は薄い赤茶で軽い。産地不詳。15は五徳である。素焼きで外面・底面に削り跡がある。脚は3本のものであろう。素地はレンガ状に黄赤色である。16は三筋の入った瓶子である。釉は一部残っているが薄茶緑の自然釉で、肩上、肩に3本ずつの線、肩下に2本の線をめぐらせている。整形は粗く特に内面は輪積み状にして作ったのか、粘土のつなぎ目がはっきりと凸凹となつてのこり、指のナデ痕や指圧痕も残る。器壁は厚く素地は灰白色である。瀬戸系の16~17Cのものである。3は内外に赤彩を施した火鉢である。外面は桐花状の花文と粗い列点を一面に捺して、その後器面調整をし磨いている。口縁の一部には切り取った窓がある。脚は低い楕円状の塊が付き、多分3箇所が付くものと思われる。素地はやや粗く断面中央は薄黒色、外側は茶褐色である。産地地元産。4は便壺である。胴部がないが推定高は90cmあまりである。外面上部は黒褐色で下部にゆく程褐色になる。素地は赤褐色である。産地は地元ではないか。

出土の遺構については土壙12が7・6・10~12、土壌4が2・3、土壌6が4、土壙1が1、他は検出面である。土壙12周辺は明治8年に島立村の仮設事務取扱所のあった地点であり、同12年に戸長役場が現出張所東側に設けられているので、この間に使用された什器であろう。となると陶磁器の生産年代もほぼ同時期と考えられる。

第1号住居址

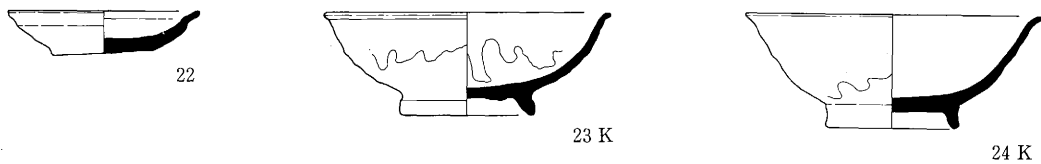


第2号住居址

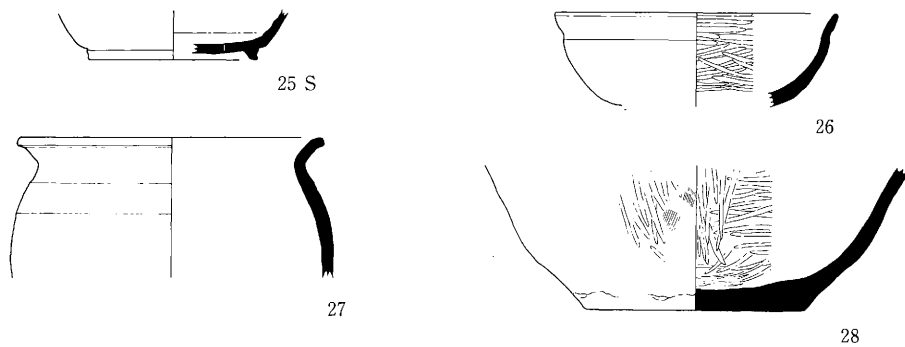


第19图 土器(1)

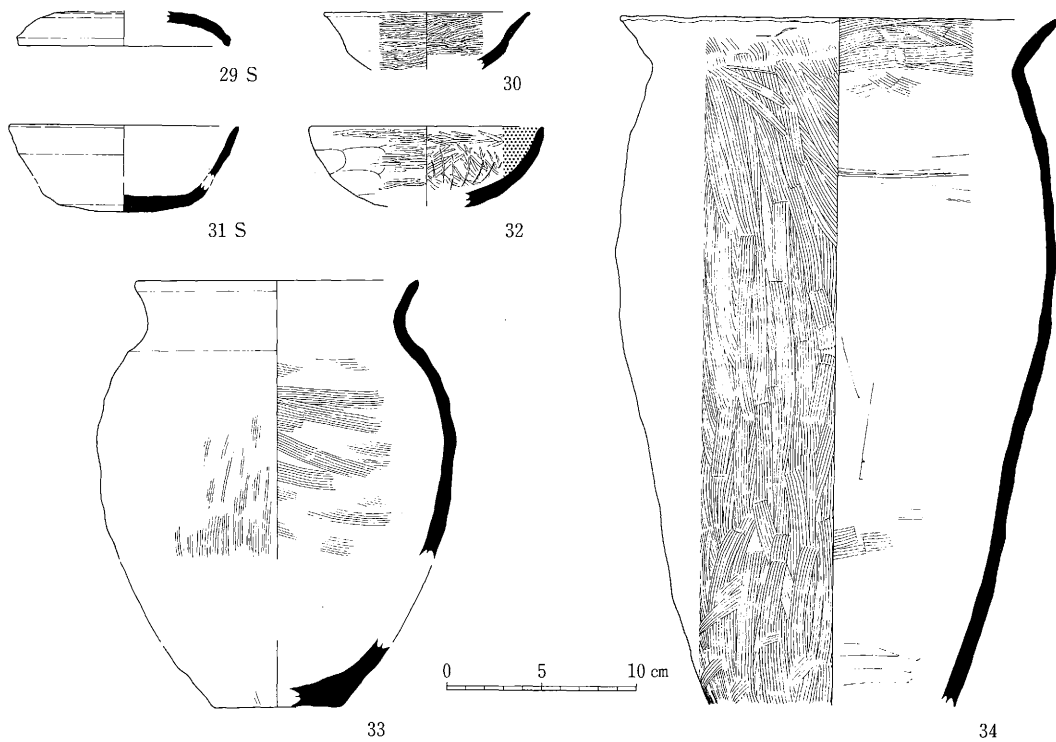
第3号住居址



第4号住居址

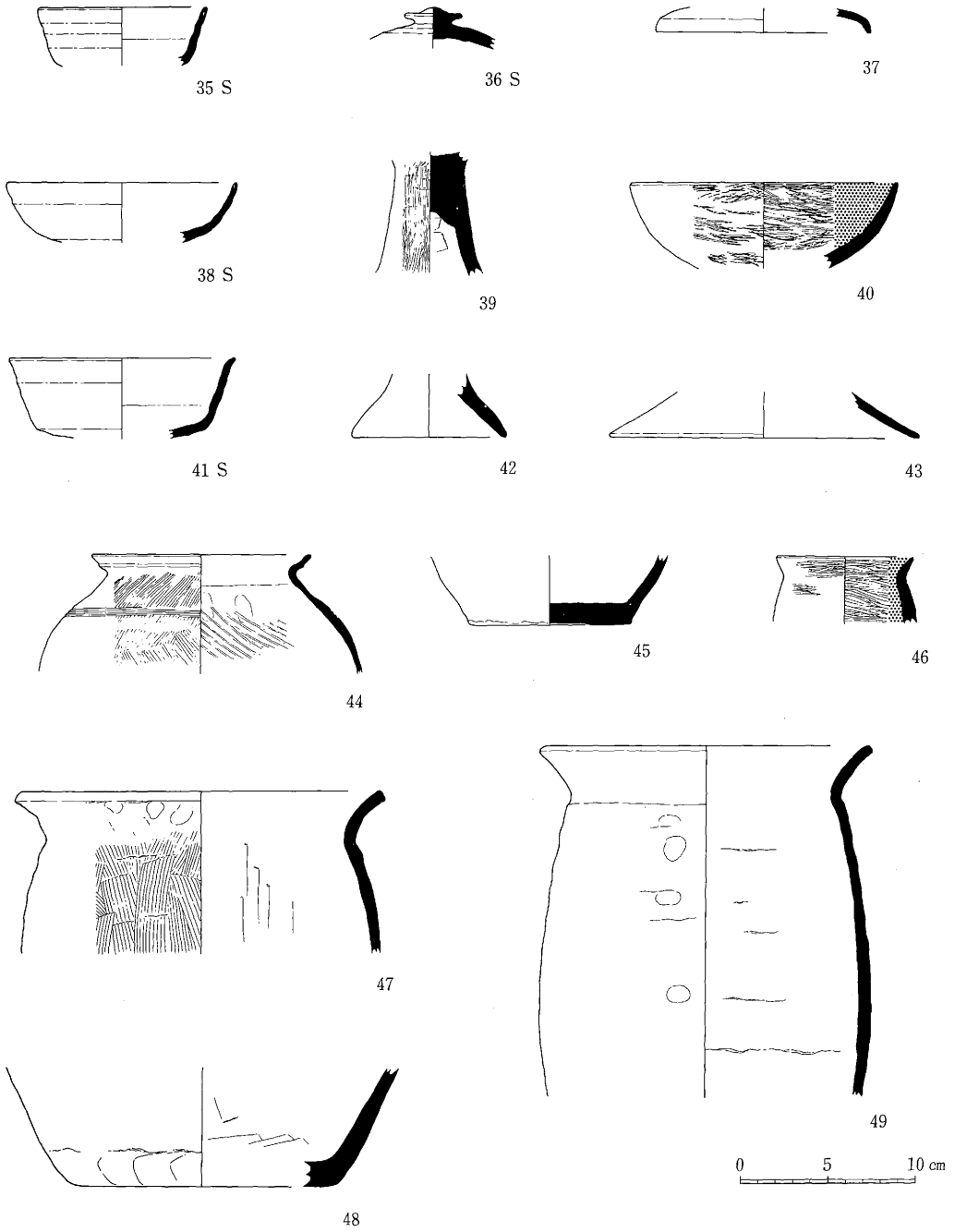


第5号住居址



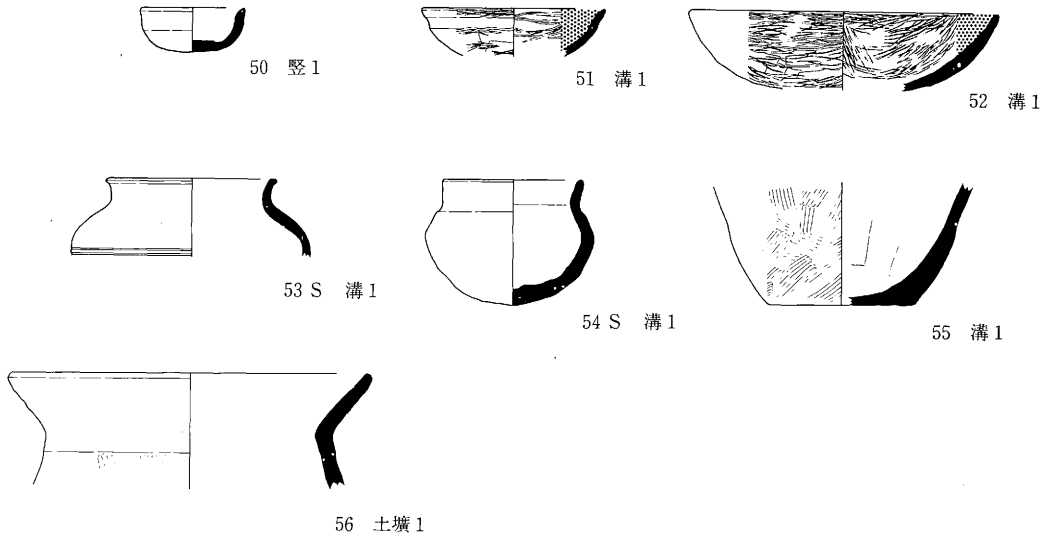
第20图 土器(2)

第 6 号住居址

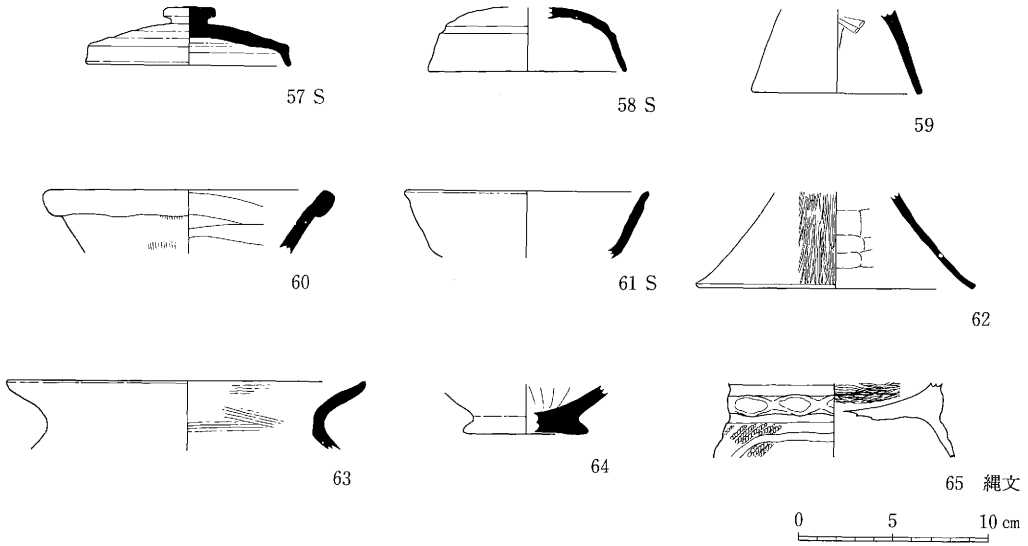


第 21 图 土器 (3)

その他の遺構

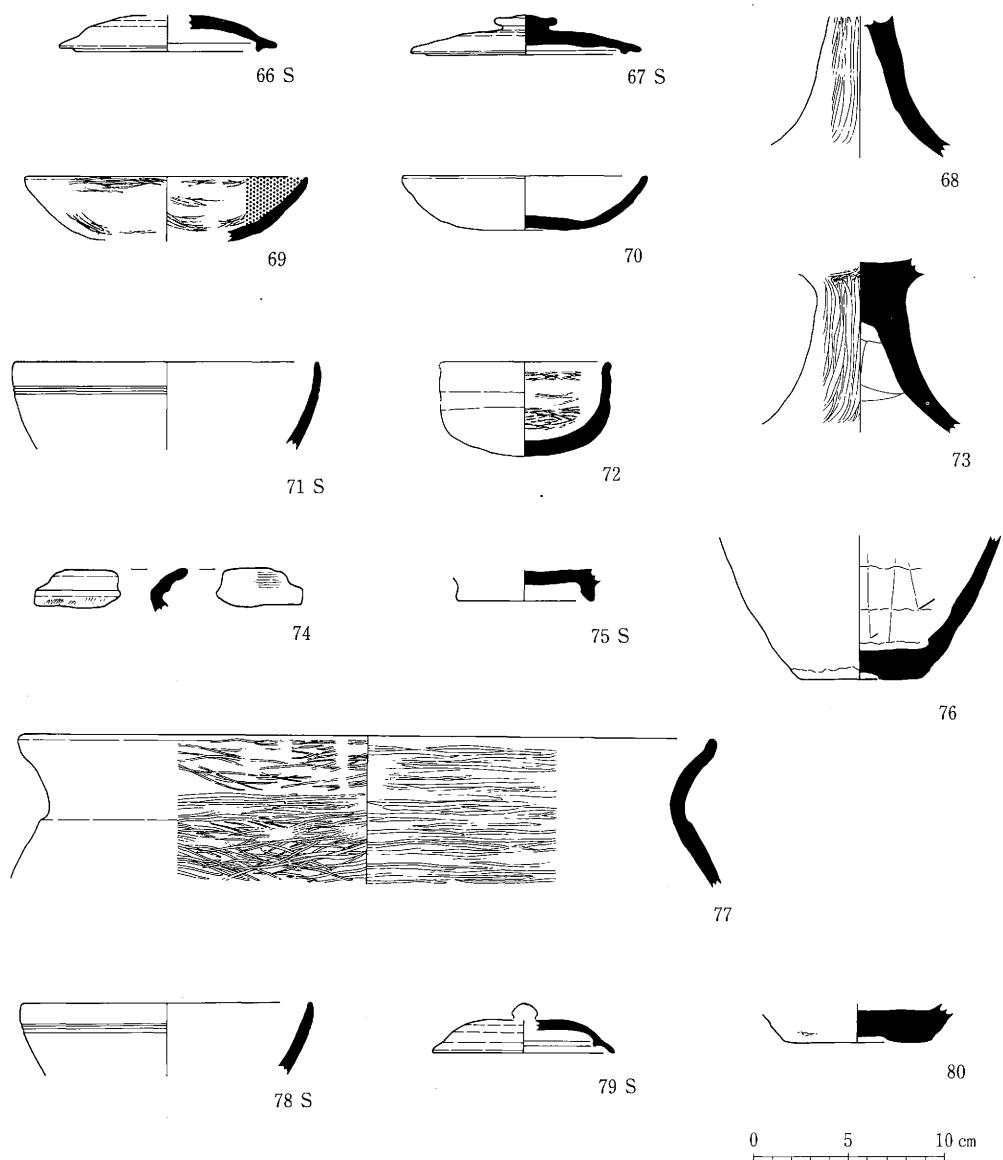


1 地区検出面



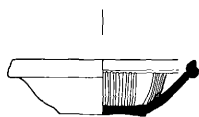
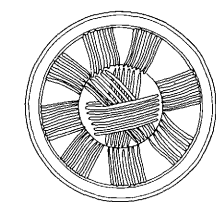
第22図 土器(4)

2 地区検出面

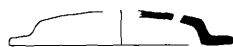


第 23 図 土器 (5)

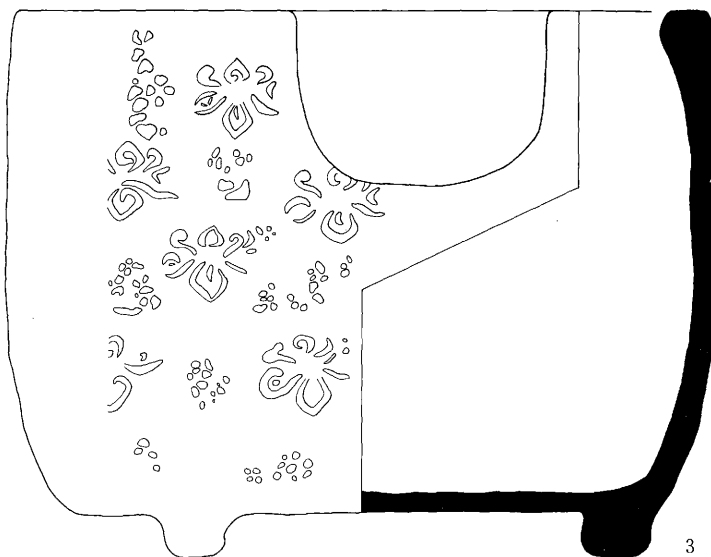
土壙



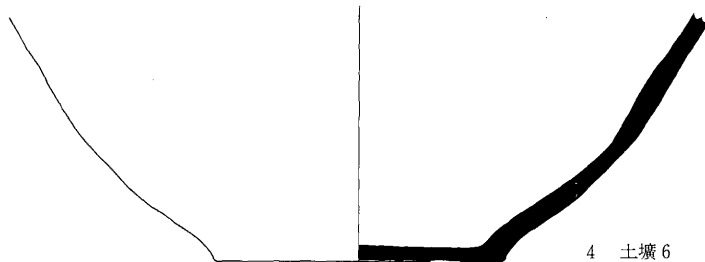
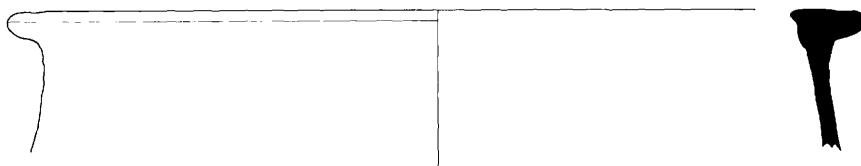
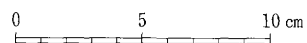
1 土壙 1



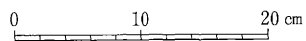
2 土壙 4



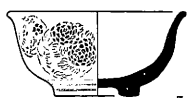
3 土壙 4



4 土壙 6



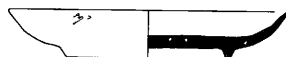
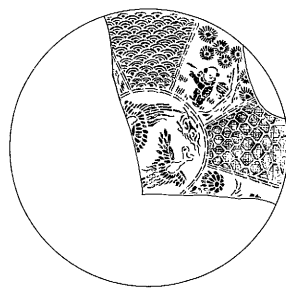
第 24 图 陶磁器 (1)



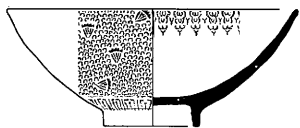
5 土壙 12



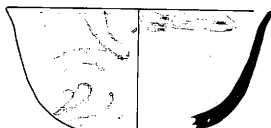
6 土壙 12



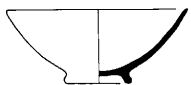
9 土壙 12



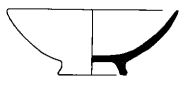
7 土壙 12



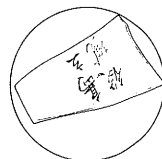
8 土壙 12



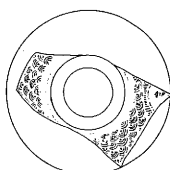
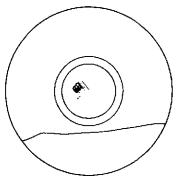
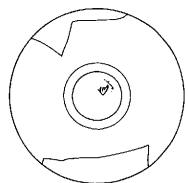
10 土壙 12



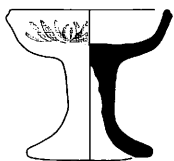
11 土壙 12



12 土壙 12



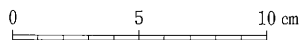
検出面



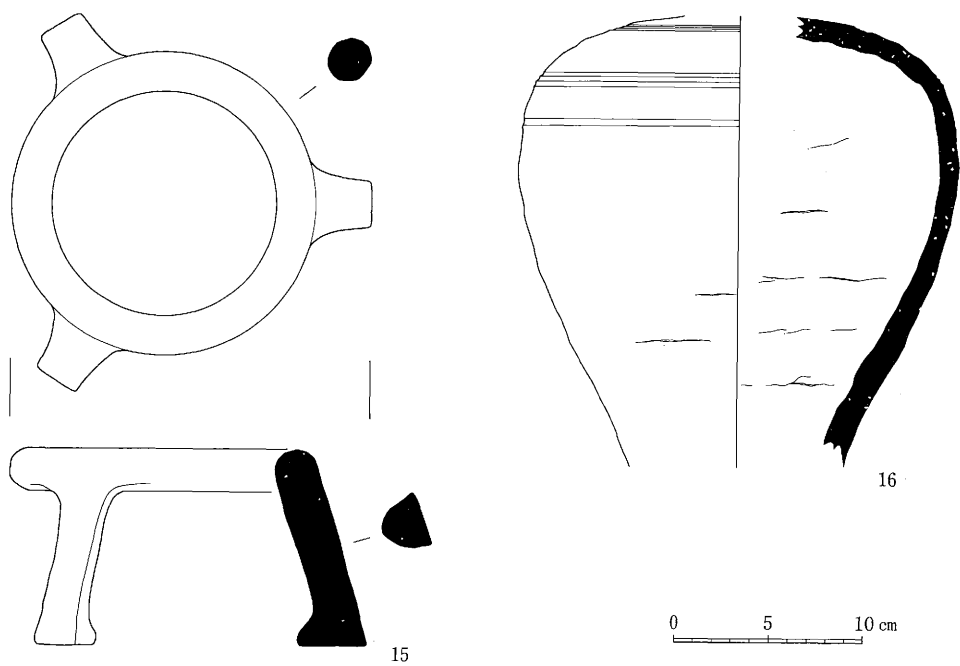
13



14



第 25 図 陶磁器 (2)



第 26 图 陶磁器 (3)

石器・土製品一覧表

No.	品名	出土地	長さ(mm)	最大巾径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	砥石	3住	100	73		(54)	(490)	漆状物質付着
2	〃	2地区第1検出面	(62)	39		27	(86)	側面に抉り、溝あり
3	〃	排土中	(59)	27		20	(67.5)	
4	土錘	6住	40	29	5		44	
5	〃	6住	44	19	4		17	
6	〃	6住	37	17	5		10.7	
7	〃	2地区第3検出面	43	23	6		19.4	
8	〃	2地区第3検出面	44	21	6		20.4	
9	紡錘車	4住		85	8	38	255	裏面に文様あり
10	硯	排土中	125	61		15	(230)	
11	〃	土壌11	(61)	61		18	38.3	
12	スクレーパー	1地区第4検出面	18	25		6	2.6	

3) 石器・土製品

石器は3種6点、土製品は2種6点である。以下器種毎に特徴的なものを見る。

砥石は3点である。いずれも粘土質岩で、1の使用面には赤みがかった黒色の漆のようなものが一面に付着している。2には側・縁部に小さな抉りと溝があり、紐を懸け持ち歩いたものと思われる。

土錘は中央部が少しくびれる管状形のもの、中央部が膨らみ両端を切断した紡錘形のものである。前者は大形なので投網、後者は刺網用にでも用いられたものとする。

紡錘車は1点である。大ぶりで裏面には太い沈線が2条巡っている。装飾的に付けた文様であろう。

硯は2点が出土している。共に粘板岩製で海部側縁(10)、あるいは新しい大きな陸部のほかに海部上縁の古い欠損を見せている(11)のものである。辰野産か。

スクレイパーは最下検出面より得られたものである。ここからは他に縄文時代遺物は得られず、付近で縄文時代の遺構を考えるならば、南方約500mに中期後葉の遺物を多量に見た地点(註)がある。

註 松本市教育委員会『松本市島立南栗・北栗遺跡、高綱中学校遺跡、条理的遺構』 1985

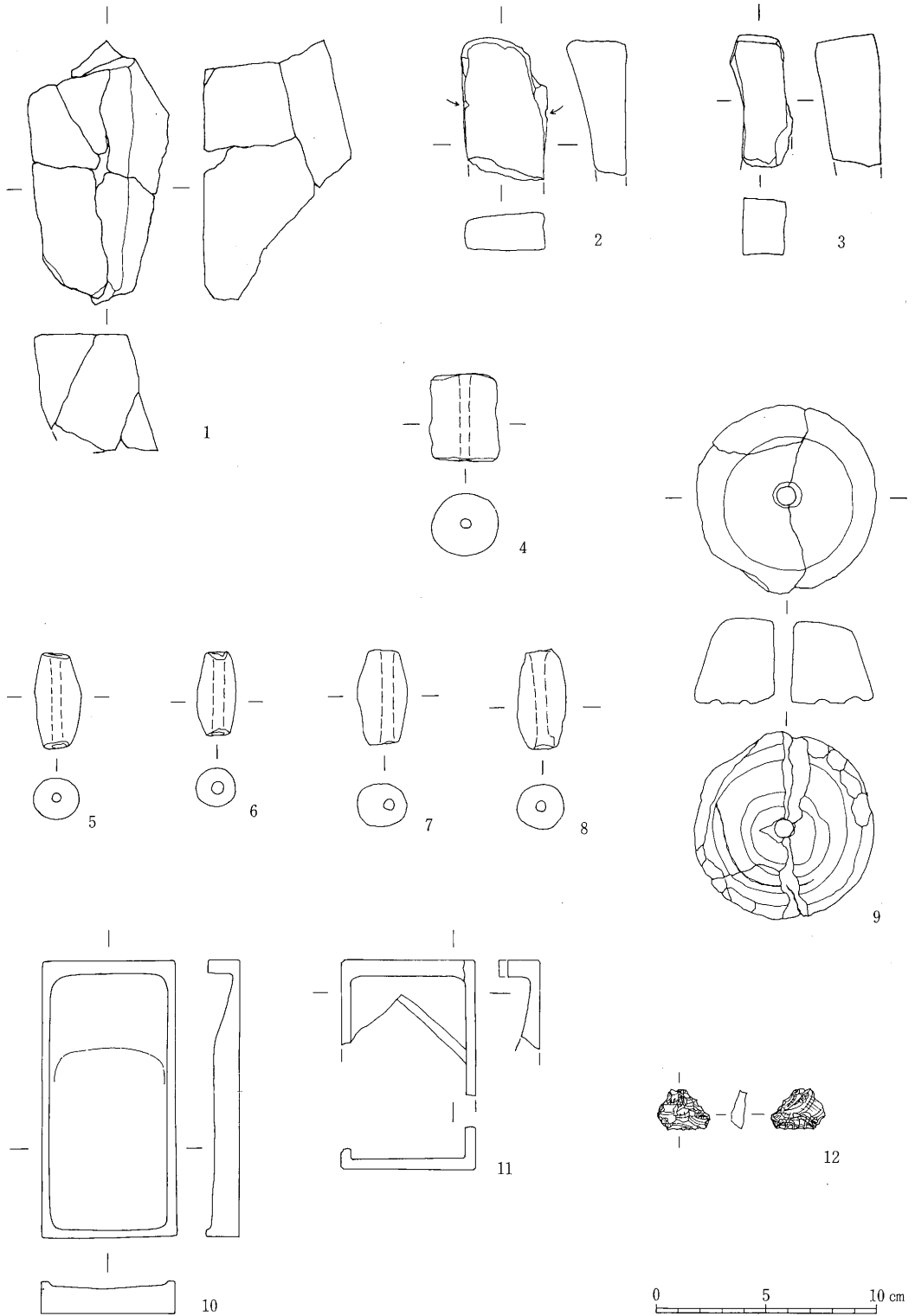
4) 鉄器

21点と古銭6点を図示したが、特に土壌12を主として多量の現代遺物があったが、図版で紹介した。1～8は棒状のもの、9～13は釘、14～16刀子、他は不明のものや煙管である。1は細長くやや曲がっているもので断面円形、2は太目のもので断面には芯が3重になっている。3は先端が細くなって中間の断面は中空になっている。5は1と似た形をなしているが、断面は四角ばって中心は中空になっている。6は釘状に先端がとがっている。7は上部に横に棒状のものが錆着いていた痕跡が残っている。8は現代ものか新しい感じのもので重い。釘類も新しいもので、中でも10・12・13は現代のものである。13は犬釘である。14は全形の残った刀子で刃幅は3cmあまり、厚さは1cmあまりで厚手である。柄の部分の断面はほぼ楕円形である。15は細目の刀子でかなり錆びており、裏

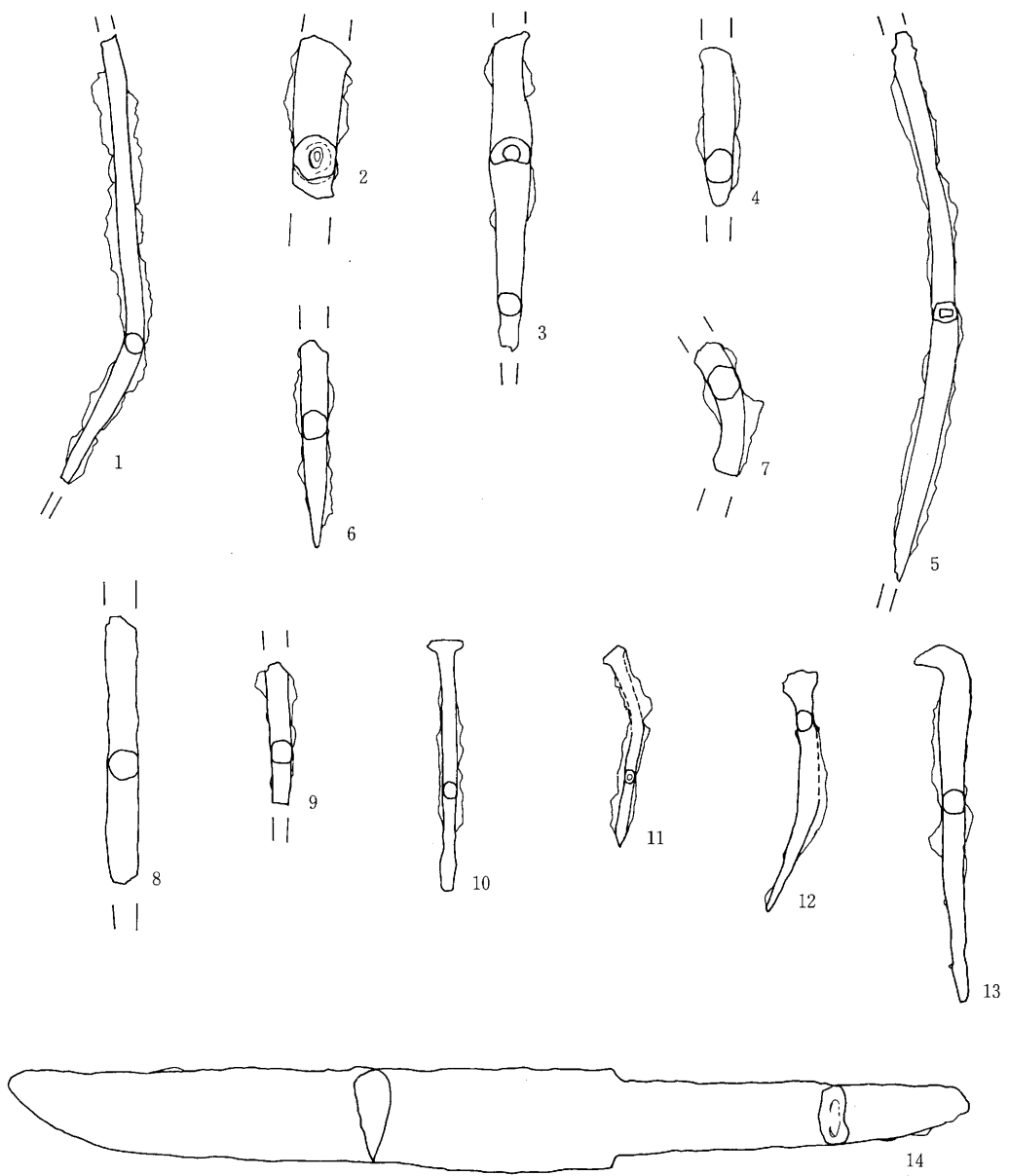
面は大きく空洞になっている。芯は重ね鍛造の跡がはっきりと残っている。16は片面一杯に細い芦状のものが着き、断面は何回も重ねて鍛造してあるものである。17は鉄鏃と思われるもので、先端部はやや扁平になり基部は円形を呈する。18は一端が環になっているもので、断面から見ると2本のを曲げてから1本にしたものらしい。用途は穴に紐状のものを通してむしろ等を縫い着けるために用いられたのではないか。19は小判型のもので用途不明。20は小破片、21は煙管の吸口部分で1cmほど羅字が残っている。古銭は皇宋通宝2、元宝通宝、〇〇通宝各1、波銭の寛永通宝1、天保通宝1である。

鉄器・銅製品・古銭一覧表

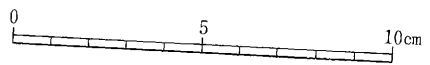
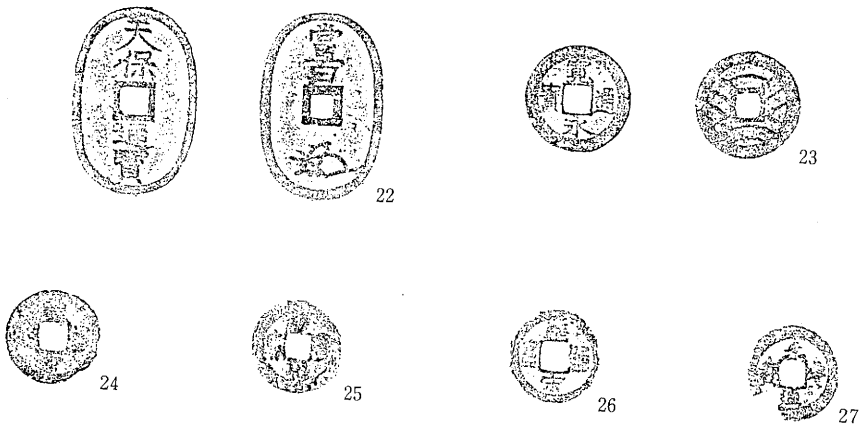
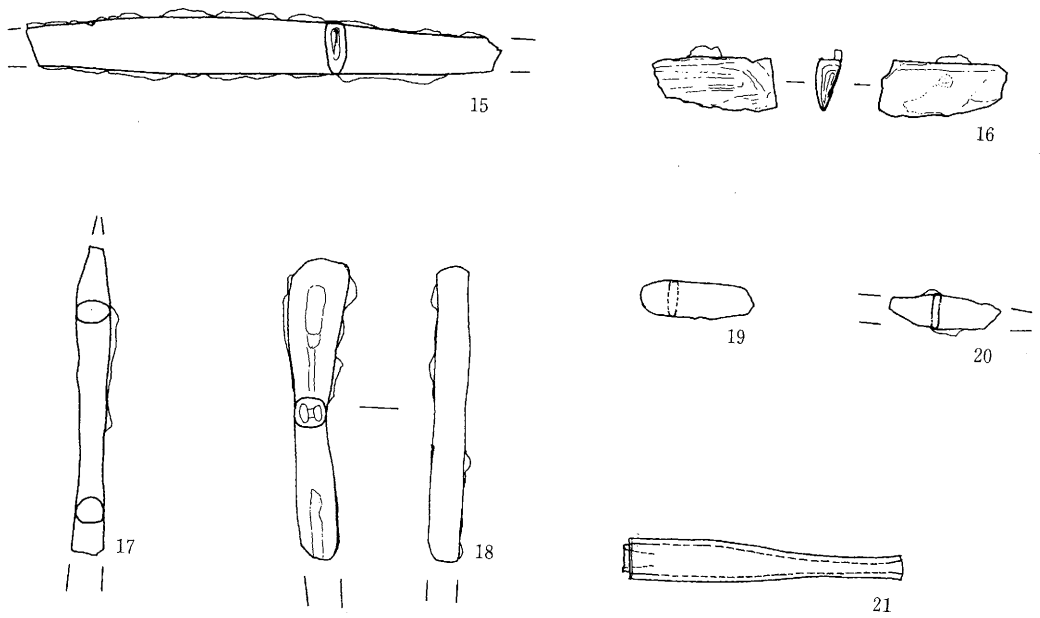
No.	出土遺構	種別	寸法 (mm)			重量 (g)	備考
			長さ	巾	厚さ		
1	6号住居址	棒状	131	5	5	12.0	
2	〃	不明	44	14	12	13.9	
3	竪穴状遺構1	棒状	86	11	6	12.5	
4	〃	〃	43	9	9	6.3	
5	2地区遺物集中地点	〃	148	7.5	5.5	16.2	
6	〃	〃	56	7	7.5	4.7	
7	〃	〃	37	8.5	9.5	5.0	
8	検出面	〃	71.5	8.5	8	21.4	現代の鉄筋か
9	土壇1	釘	47	6	6	3.9	
10	土壇11	〃	67	9.5	4.5	5.3	
11	土壇13	〃	54	6.5	4	2.9	
12	検出面	〃	66	9.5	5.5	5.4	新しいものか
13	竪穴状遺構1	犬釘	96	13.5	6.5	11.0	〃
14	〃	刀子	258	27	9.5	116.3	
15	2地区遺物集中地点	〃	124	14.5	5	20.0	
16	〃	〃	31	14.5	5	3.2	本質部付着
17	〃	鉄鏃	80	8.5	6.5	6.3	
18	竪穴状遺構1	不明	78	15	7.5	13.6	
19	〃	〃	29	9	2.5	11.0	
20	2地区遺物集中地点	〃	28.5	8.5	2	3.8	
21	2号住居址	煙管	72	11	11	16.0	
22	土壇12	古銭	49	32		19.0	天保通宝
23	土壇10	〃	直径 (mm) 27			4.65	寛永通宝、波銭
24	墓址1	〃	24			2.35	皇宋通宝
25	〃	〃	24			2.80	不明
26	〃	〃	24			2.30	皇宋通宝
27	〃	〃	24			1.82	元豊通宝



第 27 图 石器・土製品



第28図 鉄器・銅製品



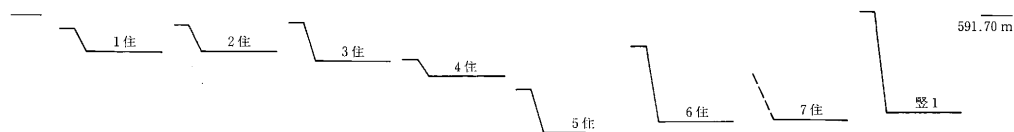
第 29 図 鉄器・銅製品・古銭

第4章 ま と め

今回の調査は隣接した狭い2つの地区を順次掘り下げて行っている。ここから境沢を隔てた南東150mの所には既に報告されている北栗遺跡Ⅲ(松本市文化財報告No.65)が、又南150mには未報告の新グランド地点があり、前者からは奈良時代中期～平安時代後期の住居址3軒、建物址2棟などが、後者からは古墳時代中期～平安時代の住居址7軒、建物址9棟などを調査している。今回の1・2両地区は接しながらも土層観察面でみると、その成立はかなり異なっていることが分かる。土質である1地区は第1検出面に畑地への利用が見られる。砂礫質中心の2地区はグランド直下に礫層が広がっていた為、おのずから第1検出面が深くなってしまい、以下両地区を同じ土層毎に調査することができなくなってしまった。

さて両地区とも最下層は黒色土(1地区)、黒褐色土(2地区)という層までで、以下は試掘を行なったが遺物を全く出土していない。このうち2地区については前項の焼土址で述べたので、ここで1地区の第4検出面(真黒色土)について触れておきたい。(18図 1地区トレンチ) ここは1地区東部で、第3検出面を剥ぎ、第4検出面に重機を入れたところ古墳時代前期の台付甕、高坏などの出土を見た。精査したが検出面は真黒で、東西10m程に広がる。遺物は2×3m程の範囲より多く出るが、すべて小片である。ここの土色は2地区の黒褐色よりも黒く、トレンチを入れて土層を観察するが、遺物はI層上部より5cm程の中にとどまり、土器片の他には焼土、石等も全く見当たらない。2地区同様に土は真黒い土から下部へ行くにつれ、徐々に黄色味を増すのみである。遺物総量は、天箱半分量と多いものではないが、この包含層と2地区に検出した焼土と合わせて、古墳時代前期の遺構の存在は確実なものである。なお、上記北栗遺跡では、S字状口縁が数点、新グランド地点にも同様土層の存在をつかんでおり、当地から沙田神社南際一帯が予想する集落の範囲であり、この時期の遺構の存在は島立にとっては特記すべき事項である。

又、2地区の溝1に見る古墳時代以降の大規模な流水とその後の広い洪水?は、この地形下方に所在する沙田神社の成立に深く関わってこよう。



遺構検出と床面(6住は掘込)



三の宮 調査開始



1地区 掘り込作業



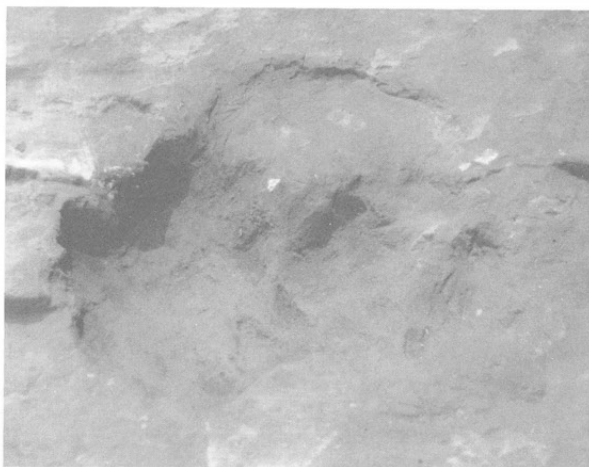
2地区 掘り下げ



1住



1住カマド付近



1住カマド残跡



1・2住



2住



2住 カマド



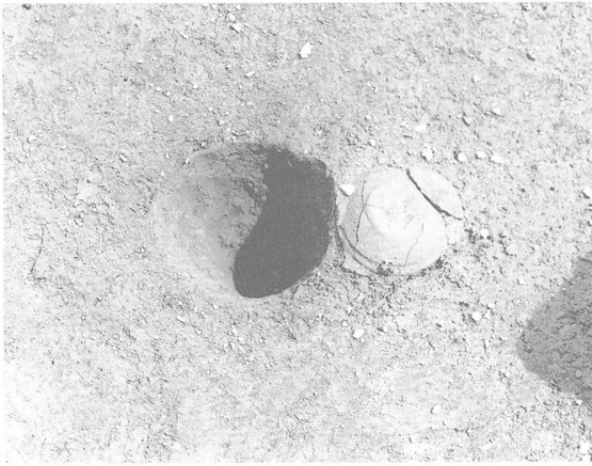
2住



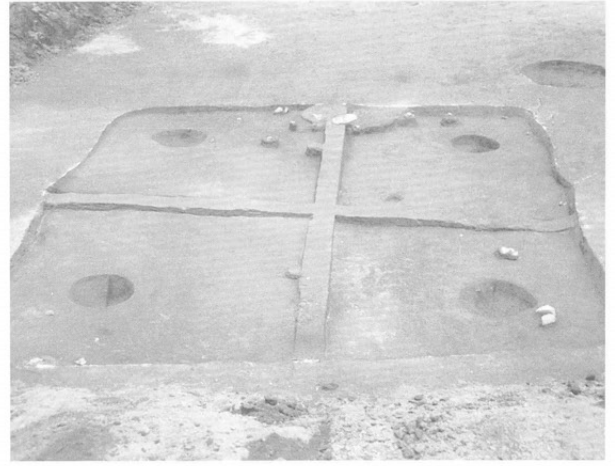
3住



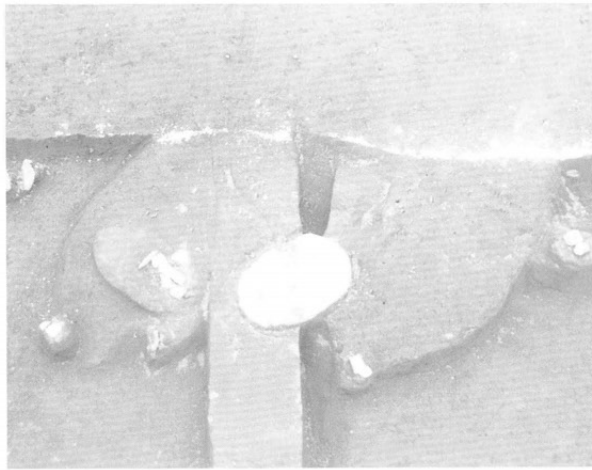
3住



3住 遺物出土



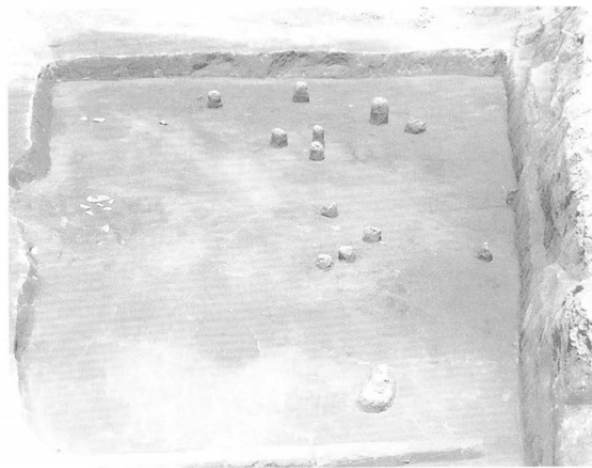
4住



4住 カマド



5住



6住



6住 カマド



7住



豎 1



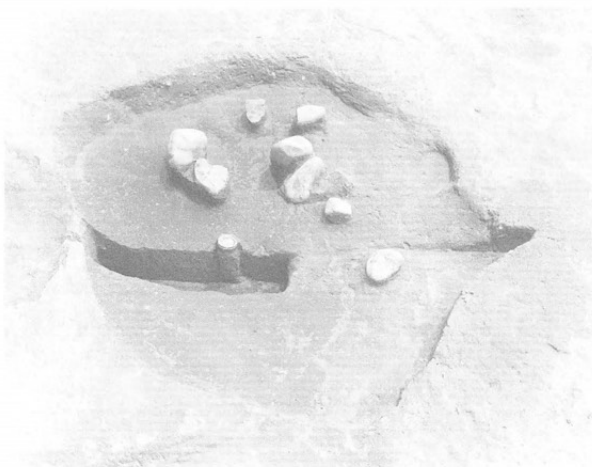
豎 1



土壙 1



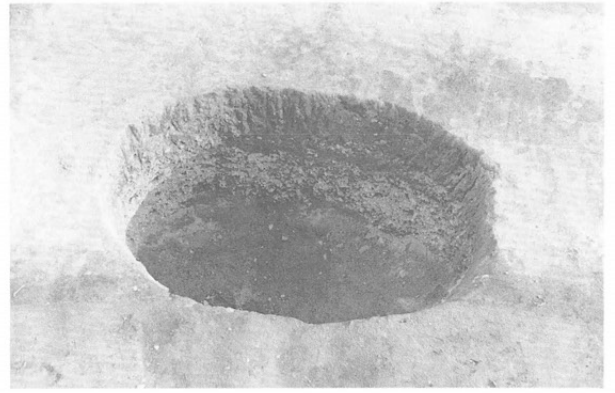
土壙 2



土壙 3



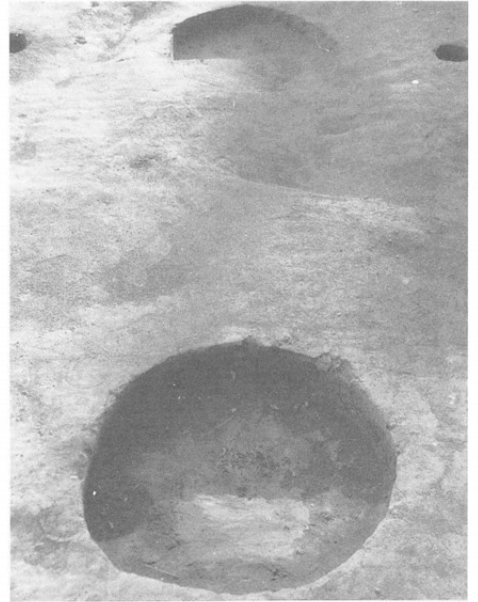
土壙 2 · 3



土壙 10



土壙 11



土壙 8 · 9



土壙 12



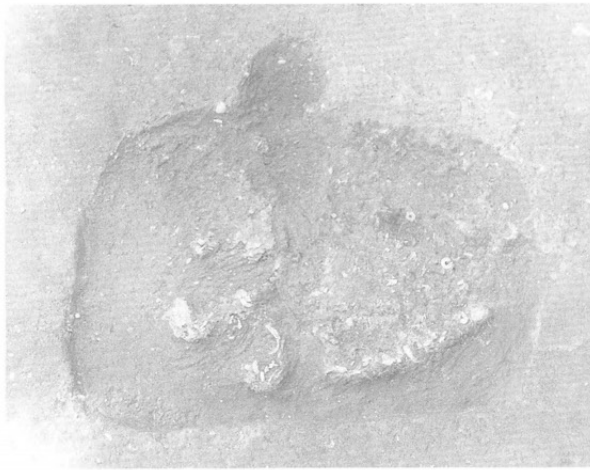
土壙 12



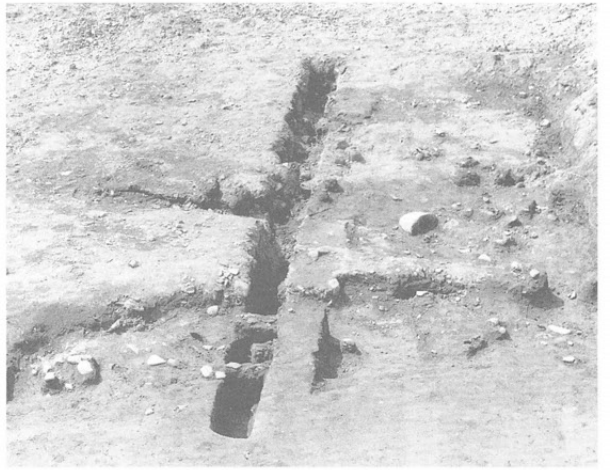
土壙 13



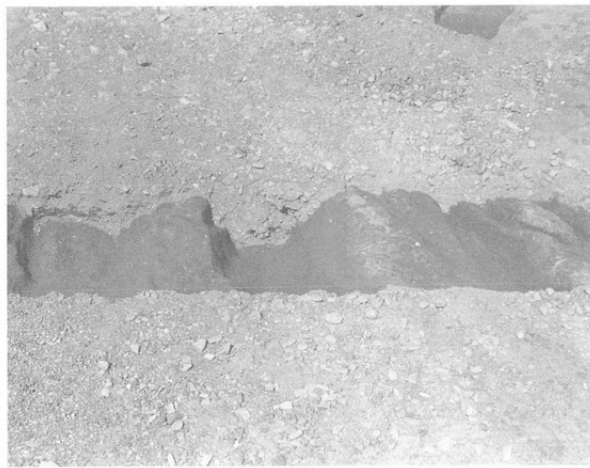
土壙 14



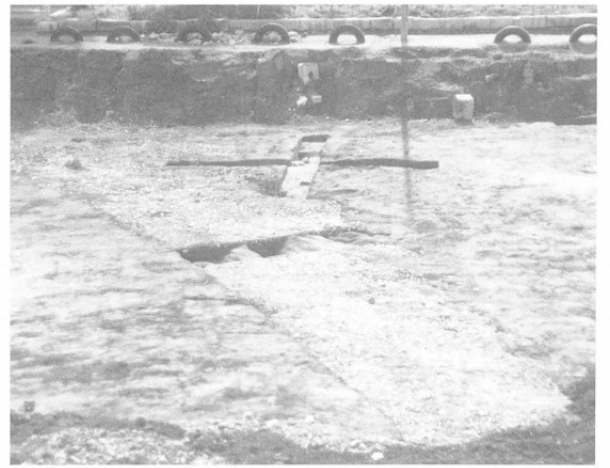
墓址 1



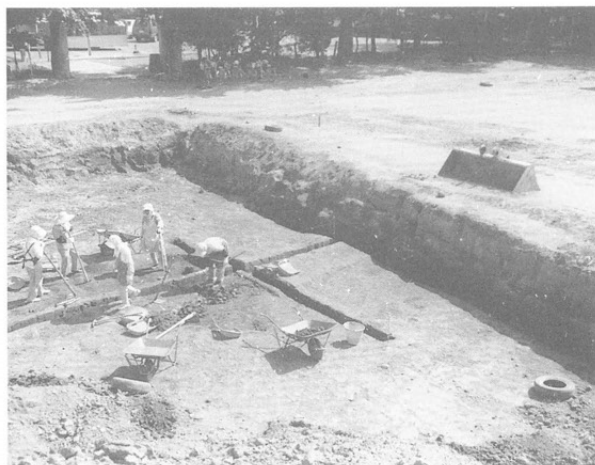
2地区 遺物集中



2地区 溝 1



2地区 溝 1 と 焼土址



1地区 6住北（古前）検出中



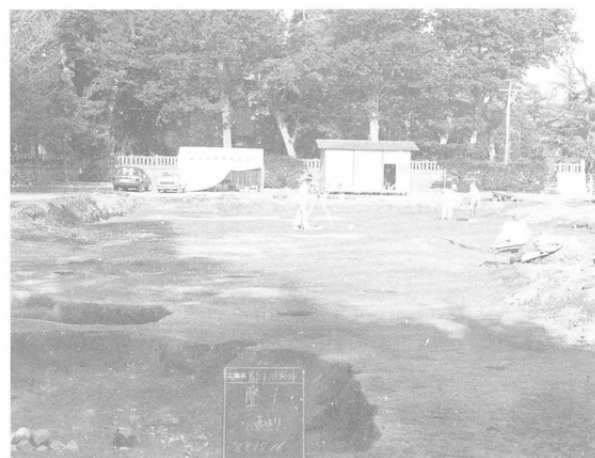
2地区 4検検出中



1地区 2検調査終了



2地区 2検調査終了



1地区（西から）



島立小 見学



1 S



15



8



17



19



11



21 K



22



72



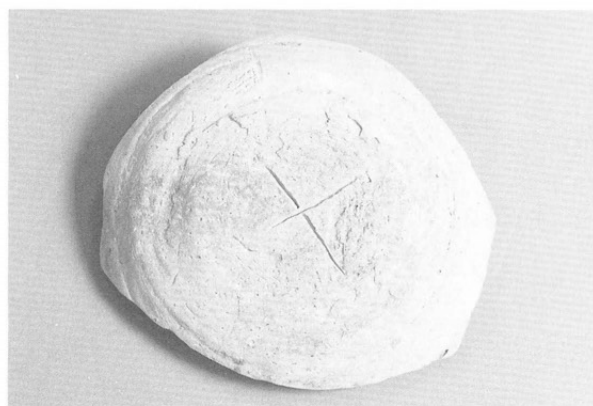
32



79 S



54 S



4 S

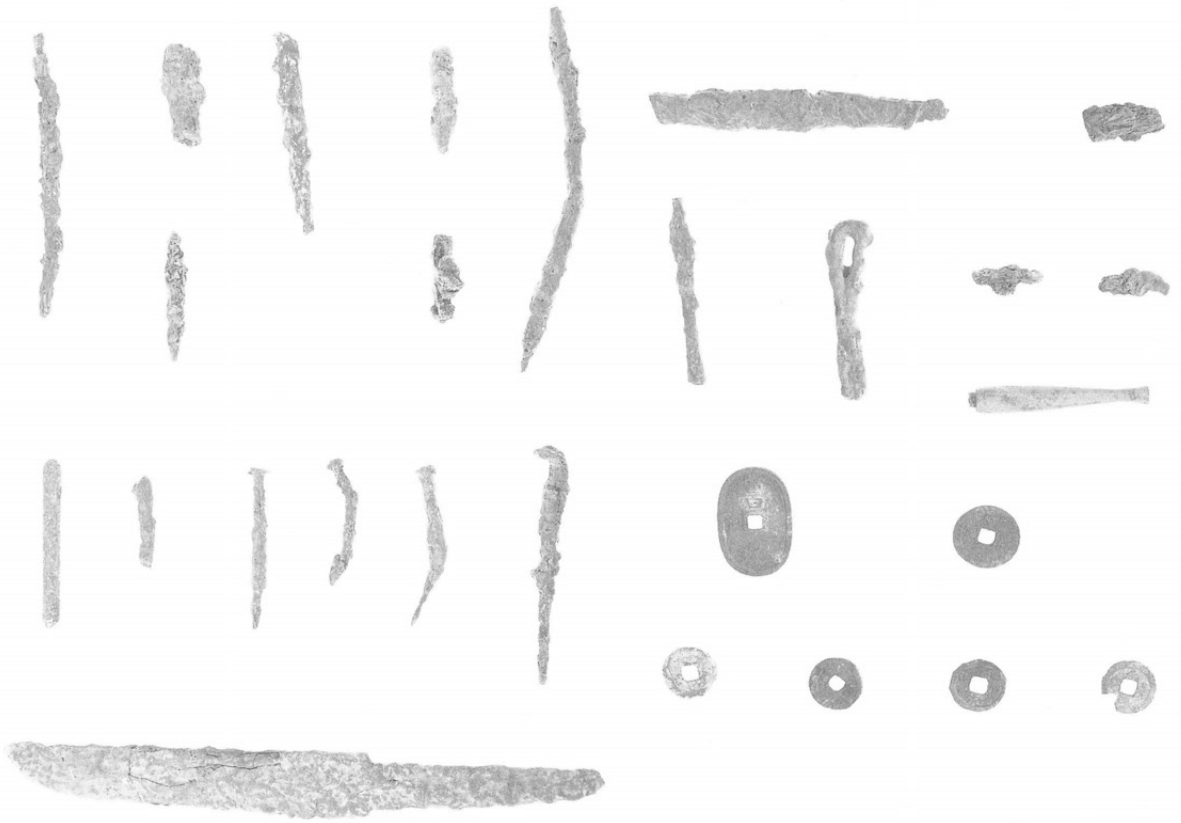


57 S



5

6



鉄器

松本市文化財調査報告No.76

松本市島立三の宮遺跡Ⅲ

平成元年 3月20日 印刷

平成元年 3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 川越印刷株式会社

